

江戸名所圖會

西垣文庫
文庫10
6556
20



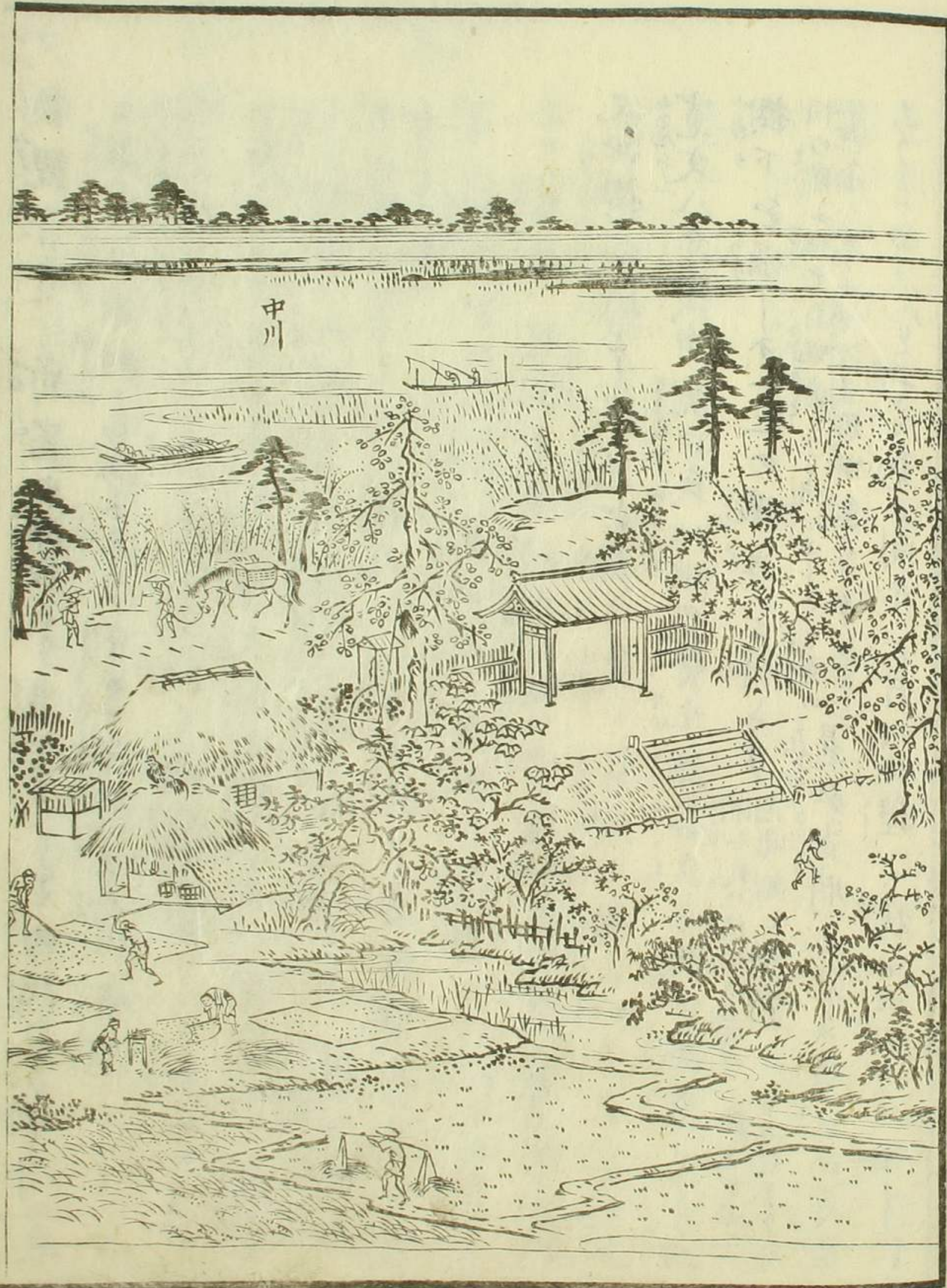
新宿 河口

新宿 河口
中 川
魚 有
所 流
中 川
魚 有
味 美
有

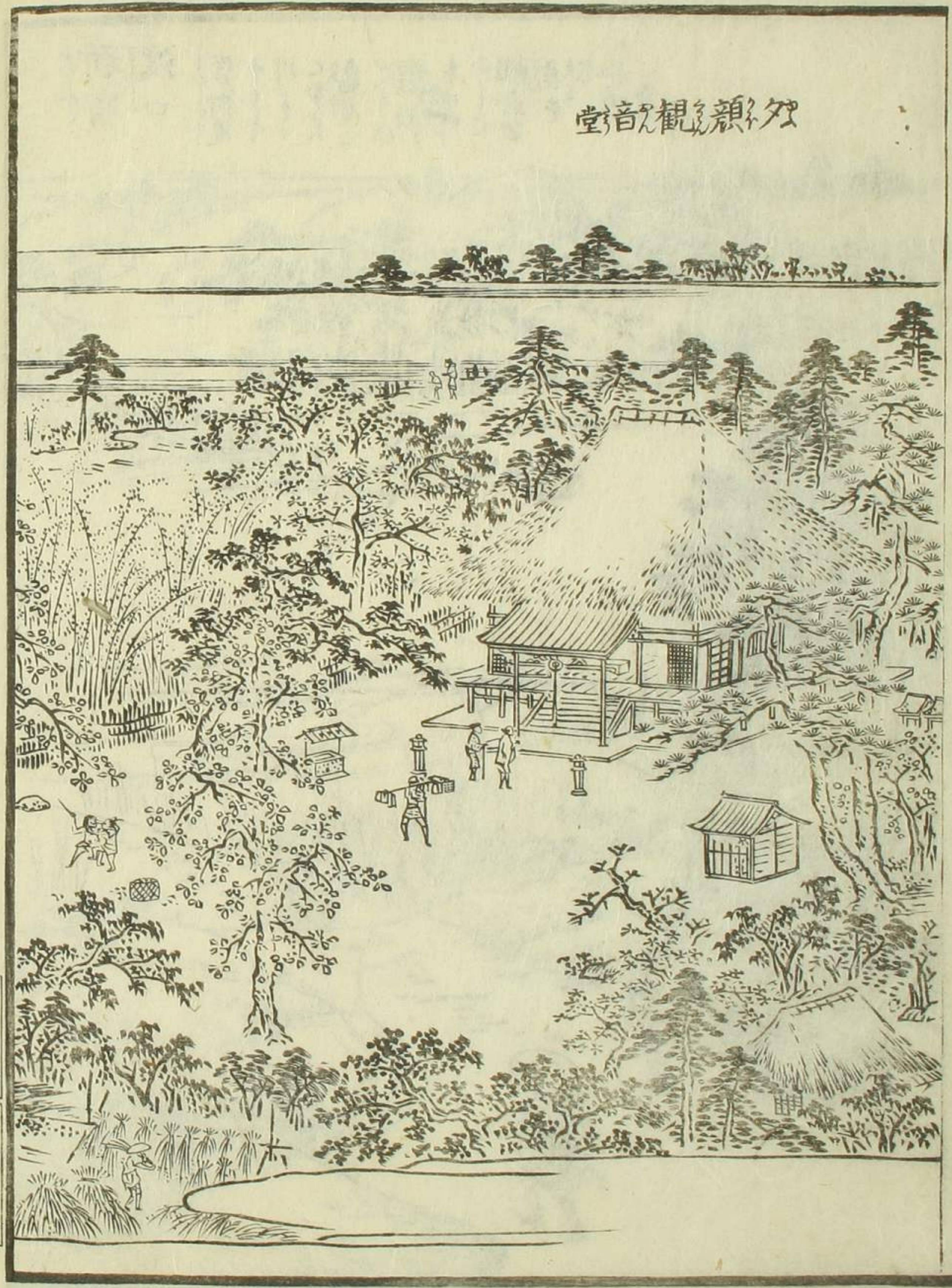


文庫10
6556
20

西遊文庫



中川



夕顔観音堂

夕顔觀音堂 新宿の渡口より半道とて西北の方中川の堤

傍に飯塚村とありあり本寺聖觀世音ハ金像ふり

深丈五寸許ありと云されとも深く内合龍に秘して拜せり

をゆきとて別々慈覺大師の刻の觀音の木像を以て合龍前

安を相傳へ此地ハ昔莊官関口氏某う采地あり

墳墓の旧址なりと 往古関口氏此地に就く熊野権現及ひ水神

等の社を創せ 此叢祠其社前より老松と榎樹の二樹の雙立する

あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増む人以此奇ありと云

又此樹間時とて光を發し或ハ龍燈の梢にかゝると云

寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀りて此

樹下を掘り一ノ二の佛具を得たり 深谷氏ハ紀州の産なり

祠の傍に住む翁温素より信心中々蓮の是必古時此地に有名の寺院

金像の大非の像一軀を獲り 佛像背面に弘長二年二月仍直ふ

深谷氏の家は移し假し佛壇に安を相好端嚴実ハ凡工の

所造よりあり然るに前宵深谷氏老翁媪共夢の

應ありを以て奇ありと云 竟に此地を闢り草堂と

營し此靈像を遷し 按て世に夕顔觀音の像ハ執風の中より出現

紫式部の念持佛なりともいひ傳へり此地の縁起に載るを異之何の

夕顔の形ありや 猿 新宿より北の方の邑名なり

神鳳抄曰 下總國 葛西 猿 猿 御厨 百八丁 新御厨 在之 云云

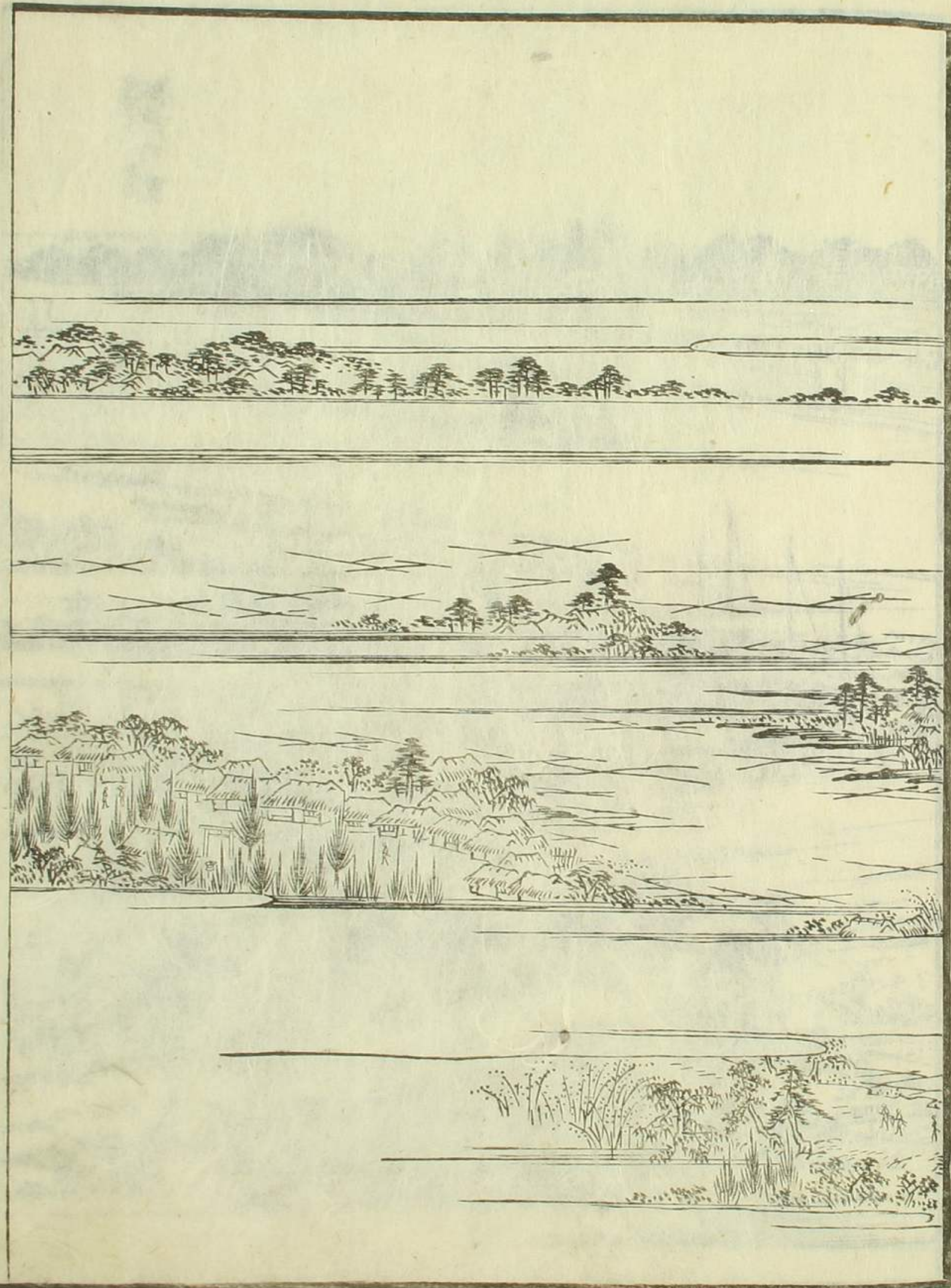
北条家永祿二年所領役帳に窪寺大藏丞といふ葛西猿侯四十九貫文の地を

領しあり葛西今武蔵國に屬すといふ古書にあり

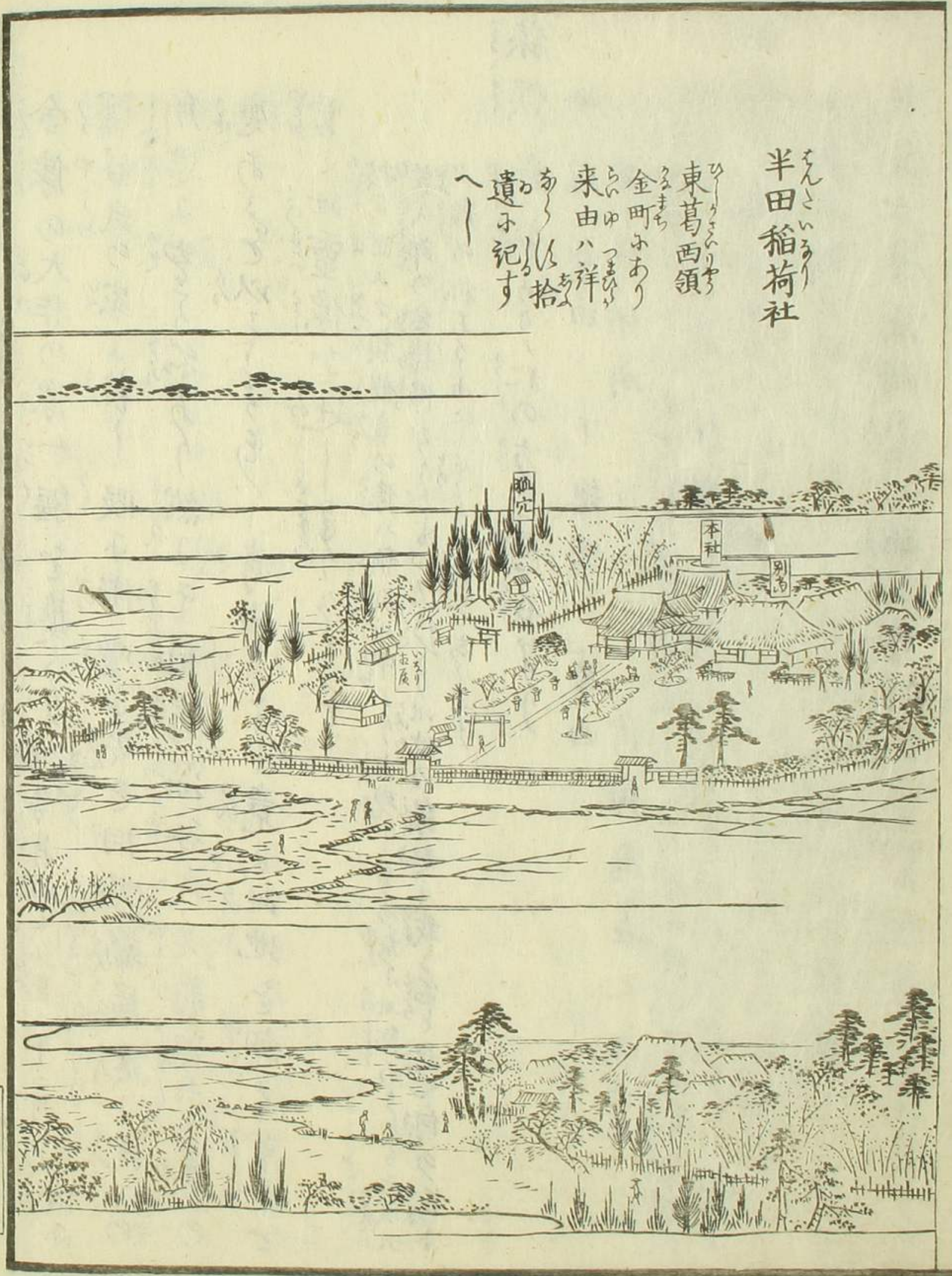
和銅寺廢址同所あり佛生山と号し 真言の古藍

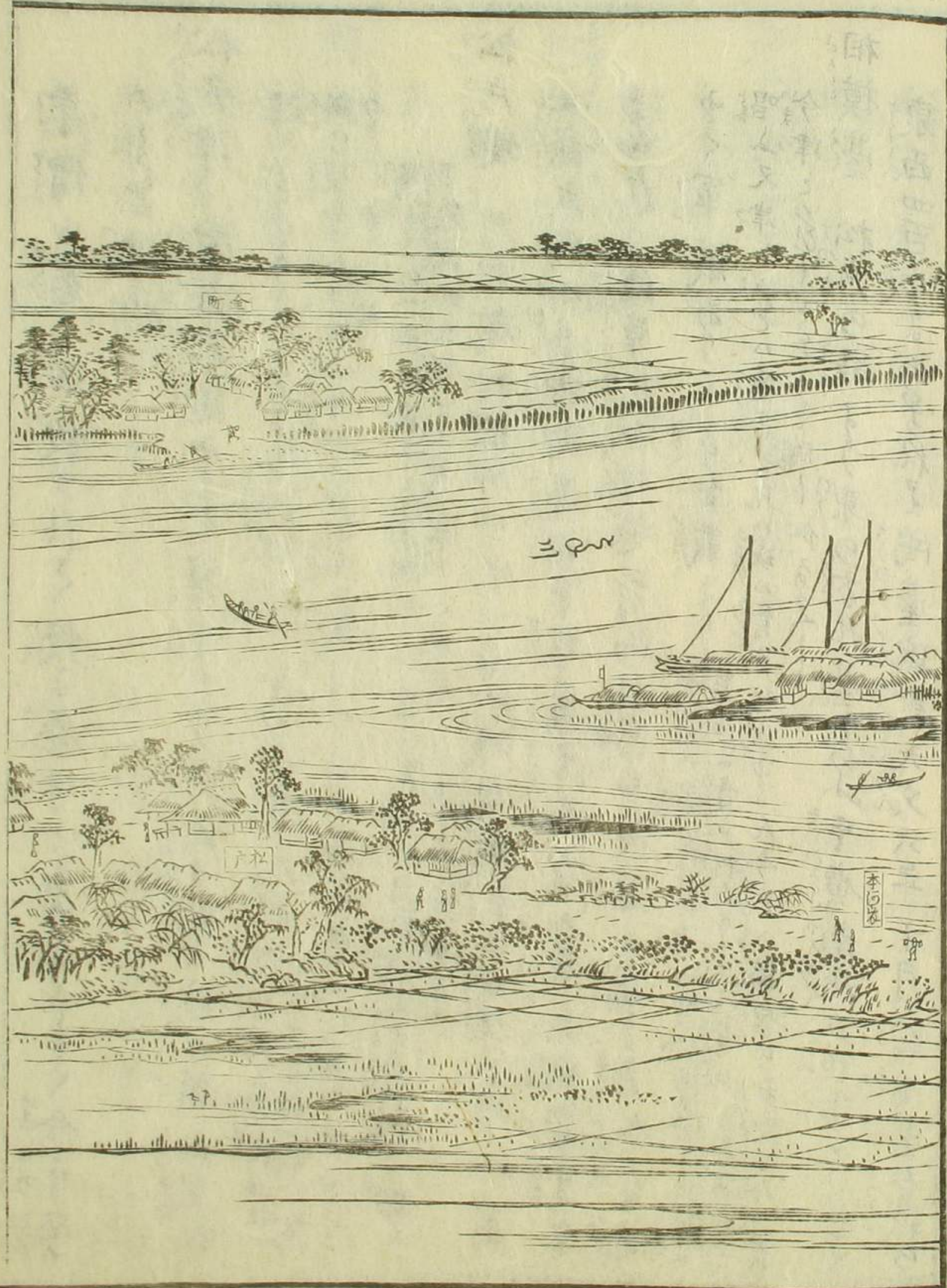
和銅年間の草創ありと云傳へ中古迄も伽藍巍々あり

天文六年國府臺合戦の時兵火の爲に灰燼となり

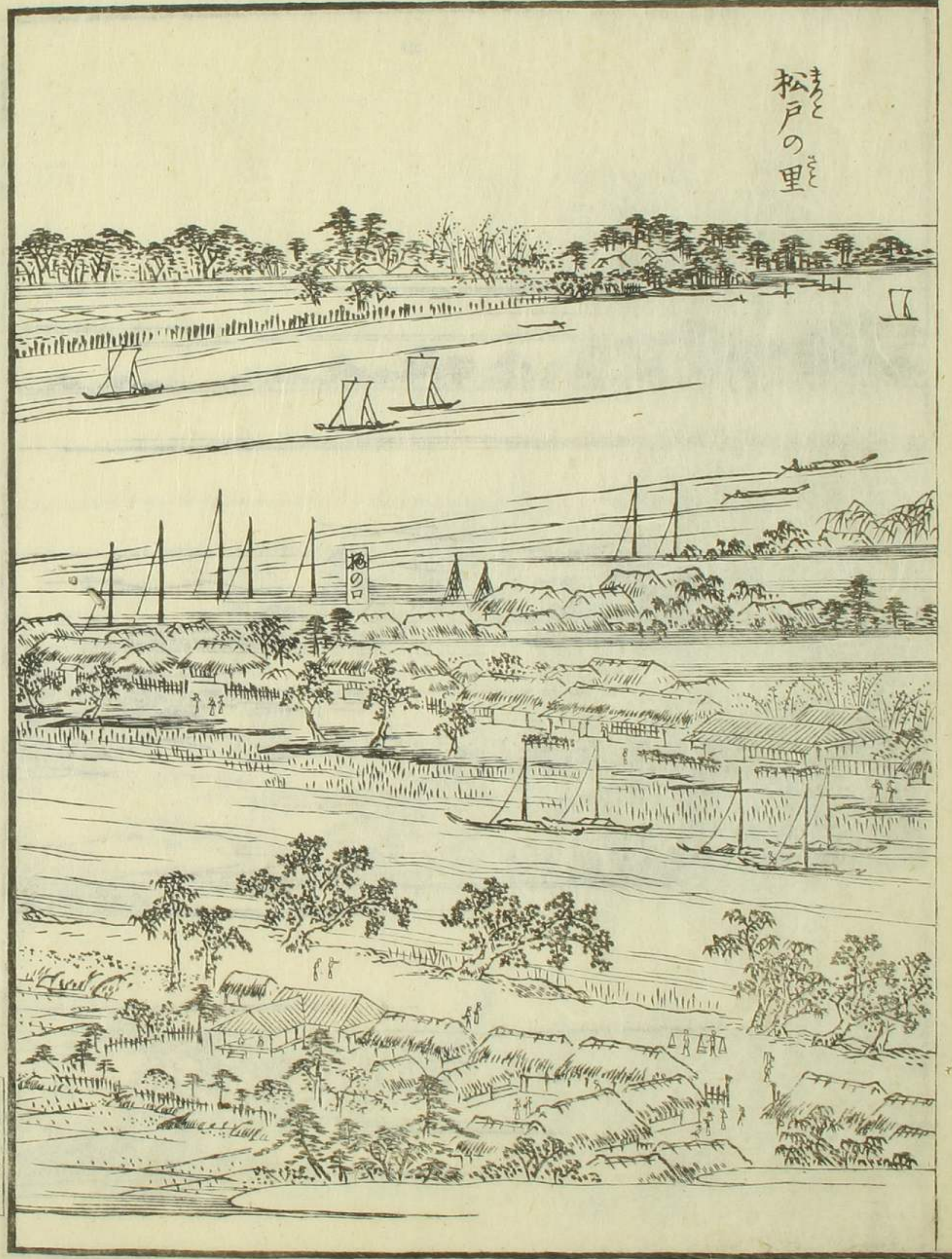


半田稻荷社
 東葛西領
 金町あり
 来由ハ洋
 遺小記す
 へー





ま
と
松
戸
の
里



七
百
三
十
四

寺僧も悉く追殺され終に廢寺となり今其号のつと傳ふ

松戸津 常陸街道中々驛舎あり更級日記に鏡の瀬松里此

津よりありくとも此地のつとありん故 美経紀は治承四年九月十日武藏と下

松戸堤 同所新利根川の堤をり鴻臺戦記に天文六年十月

北條氏綱小弓所義明を攻り頃月四日の夜氏綱夜半に

まきれく浅草川を打越功の宿を夜深を通り色松戸の堤

相模臺 松戸の驛より東の方此臺をのみ 廣南北五百歩あり

条下は松戸の川を打越津陣の内よりも推津村上堀江鹿島と

始とく五十騎とく相模臺は打揚敵の人数と見合せたり

小弓御曹子墓 鴻臺戦記義明滅亡の条下は乳母レンセイといひ

行徳船場 行徳四丁目の河岸なり土人新河岸と唱へ旅舎あり

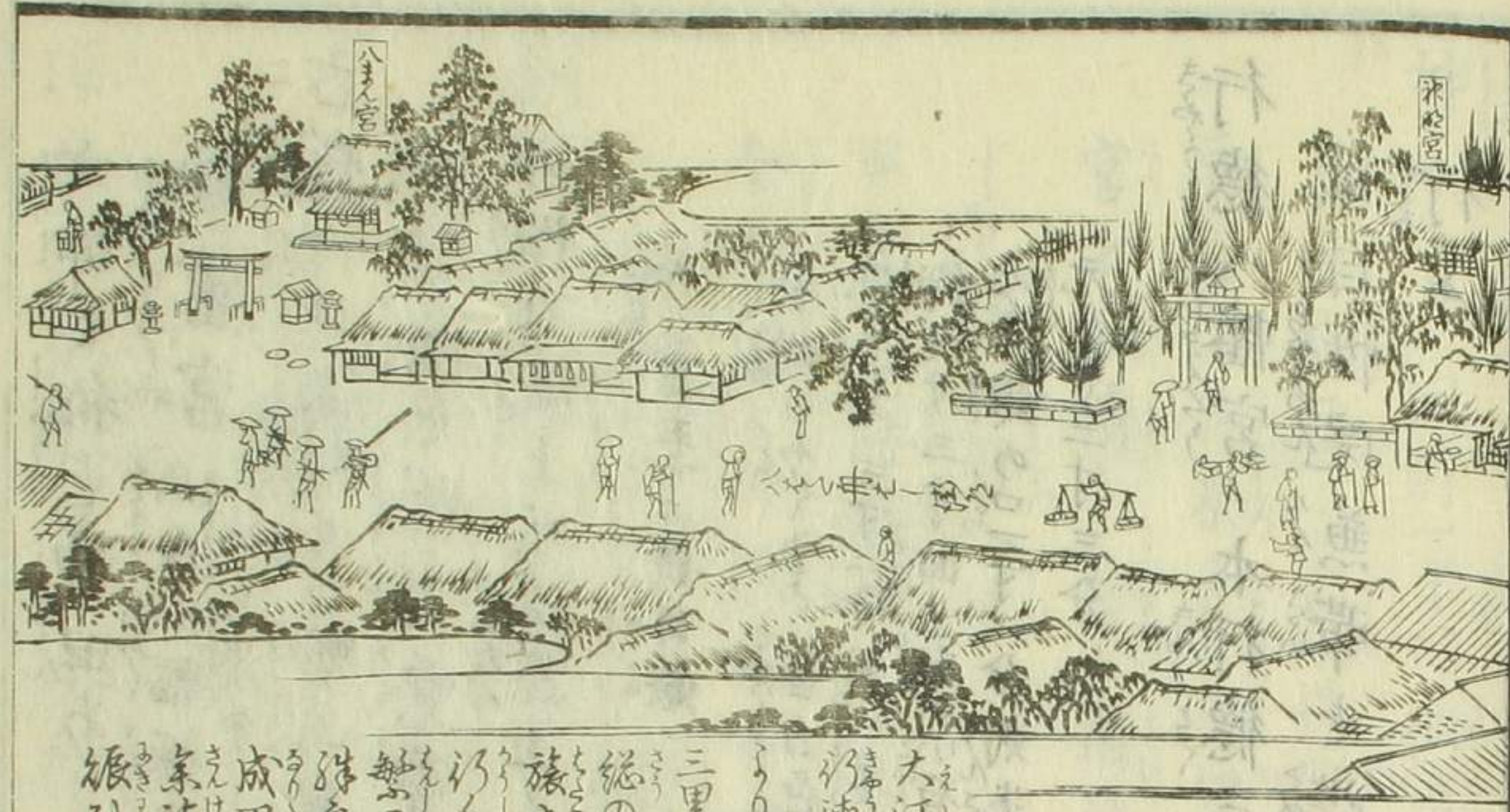
て賑はへり江戸小細町三丁目の河岸より此地追船路三里八町

辨財天祠 同所四五町下の方湊村より昔ハ潮除堤の松林の

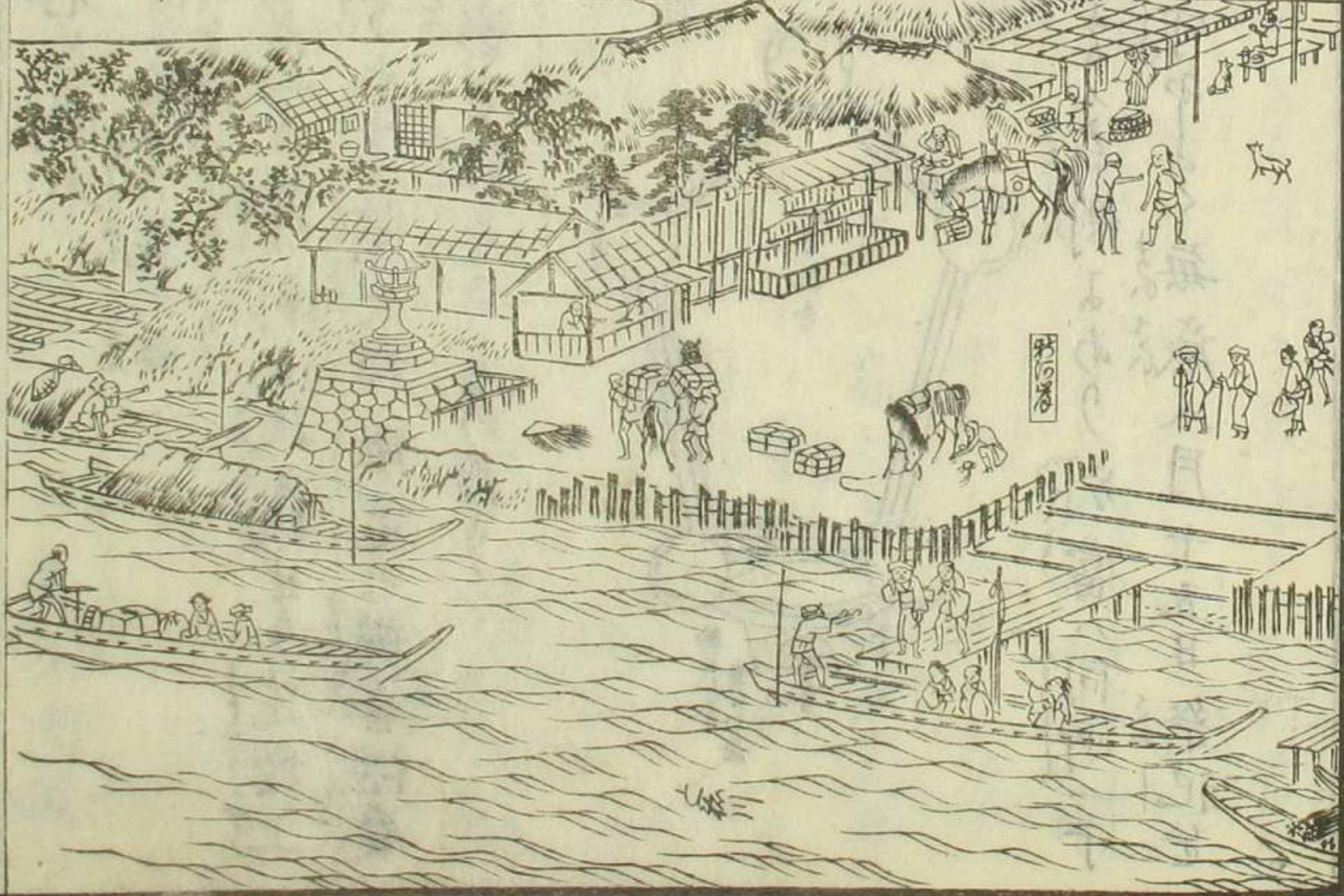
江戸青山梅窓院の順誉唯然和尚此神の靈尔より享保

三年戊戌宮居を建立ありとのみ祭るを藝州嚴島の清神

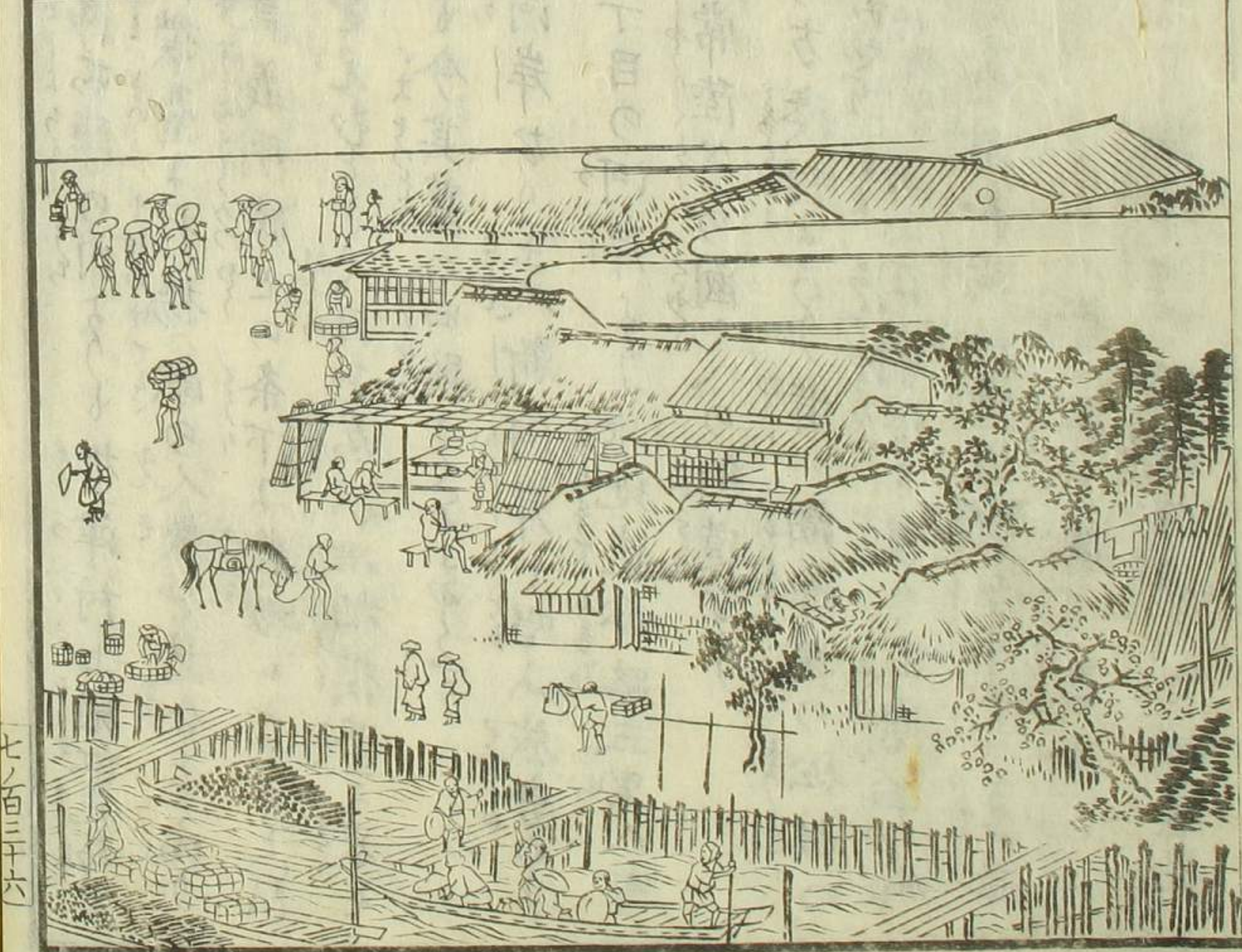
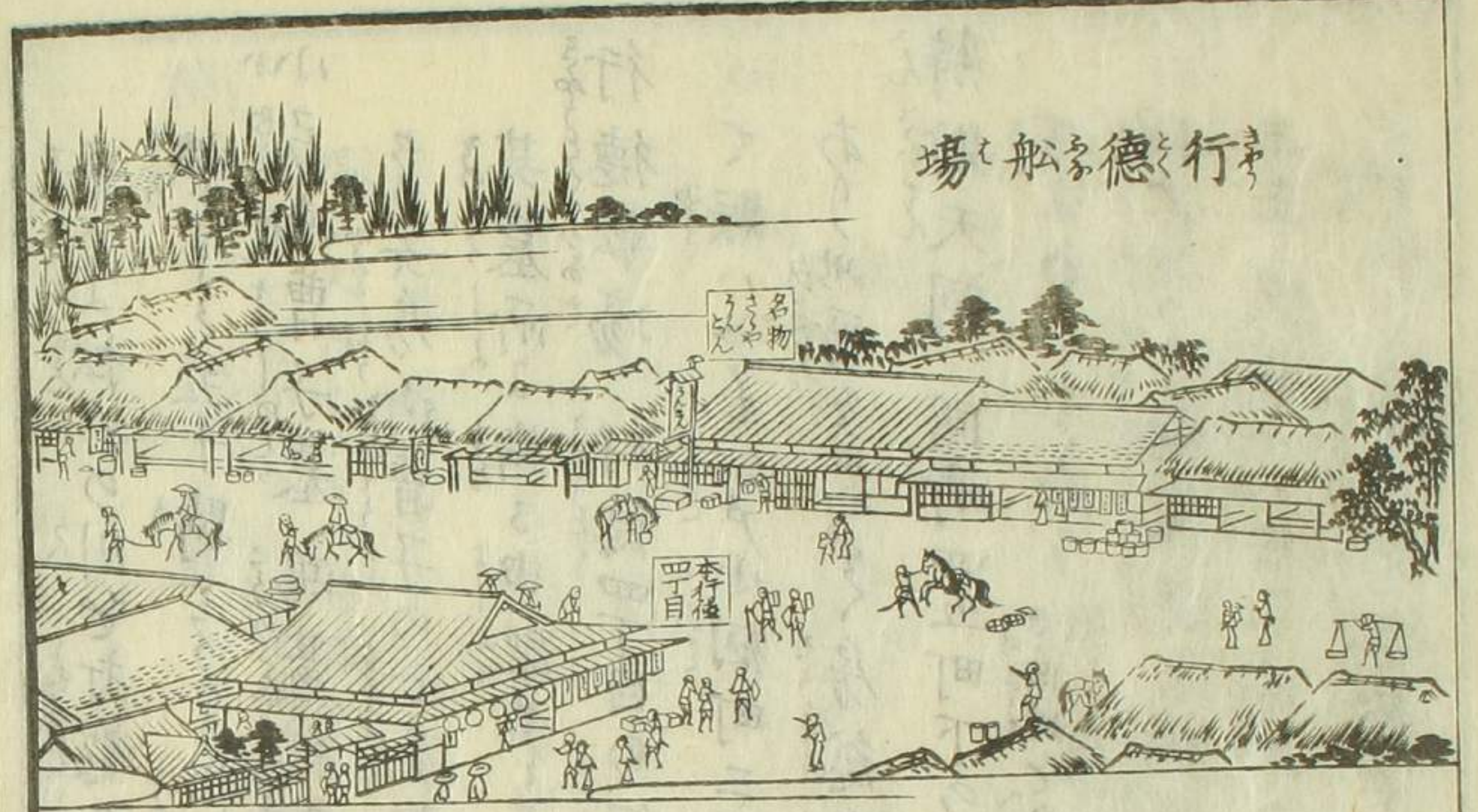
小同く市杵島姫神中々海神村の阿諏訪神ハ男神尚社



大江戸小細町三丁目
 乃徳河巻といへる
 りりけ地まて
 三里八丁あり房
 徳の張路ふて
 張亭ありあま
 乃人絡繹とて
 禁昌の地なり
 成田不動堂へ
 糸指の人影
 旅ひ大方



徳行の船場



女神と称を神田あり弁天免と唱ふ

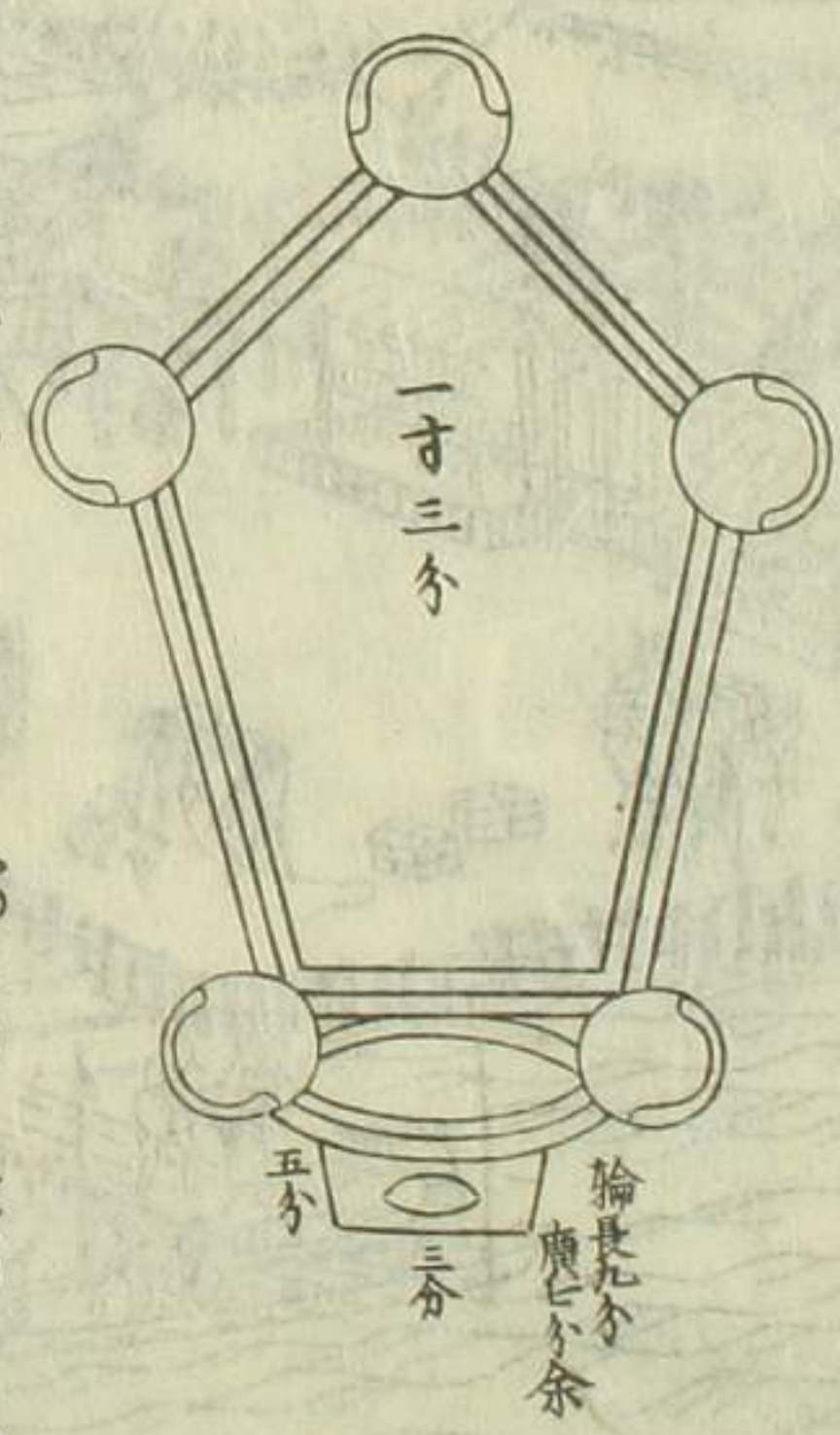
船靈宮 画像一幅探信の事あり古此地大船

古鈴一口湊村青陽山善照寺とつる浄刹は收藏せり芝増上

寺は屬を開山ハ覚誉上人と号を慈覚大師彫造の観音湛慶の作の焰王又法然上人鑑師影と称せるものあり

斤量五十二錢目餘

唐銅のゆくゆく甚古色あり
惣長サ三寸二分劍の裏延板
鈴大サ三寸回り内小石一宛
あり鈴の口二寸八分劍先あり
元まて二寸三分



行徳八幡宮 本行徳三丁目道より右側あり別當八同所一丁

目自性院兼帯此地の鎮守や毎歳八月十五日祭祀を行ふ

神明宮 同所一丁目街道の左側あり此地の鎮守とて別當ハ

真言宗や自性院と号す毎歳九月十六日を以て祭祀の

辰とす其祭を伊勢内宮の土砂を迂して内外兩皇大神

宮を勧請し相傳ふ當社昔ハ川向中洲と云地はあり

その後此所へ遷せり又此地を金海の森と号く慶長十九年

甲寅金海法印とつる沙門此地は一字の寺院と開創して

金剛院と号し依て金海の森と名を廢せり

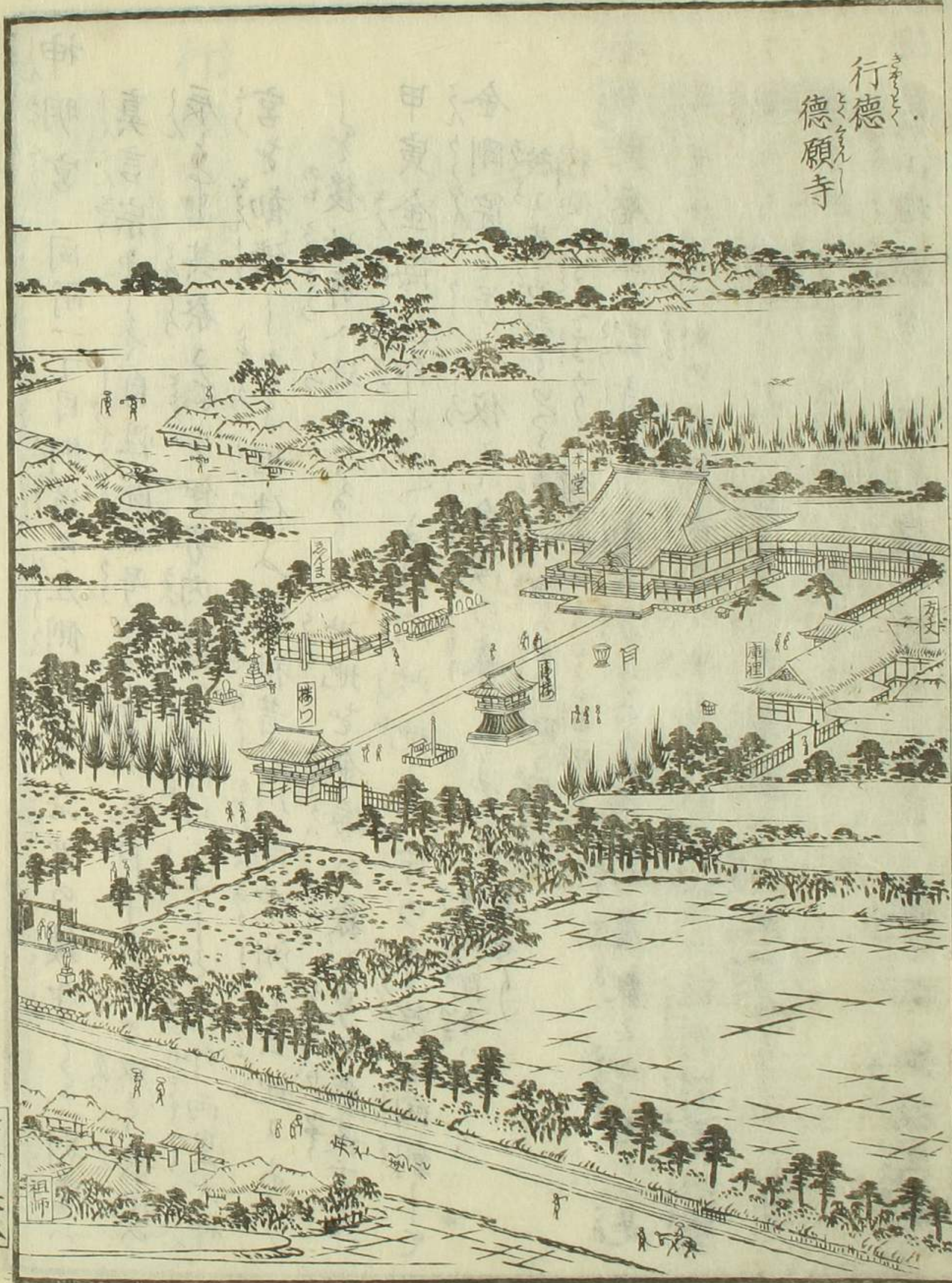
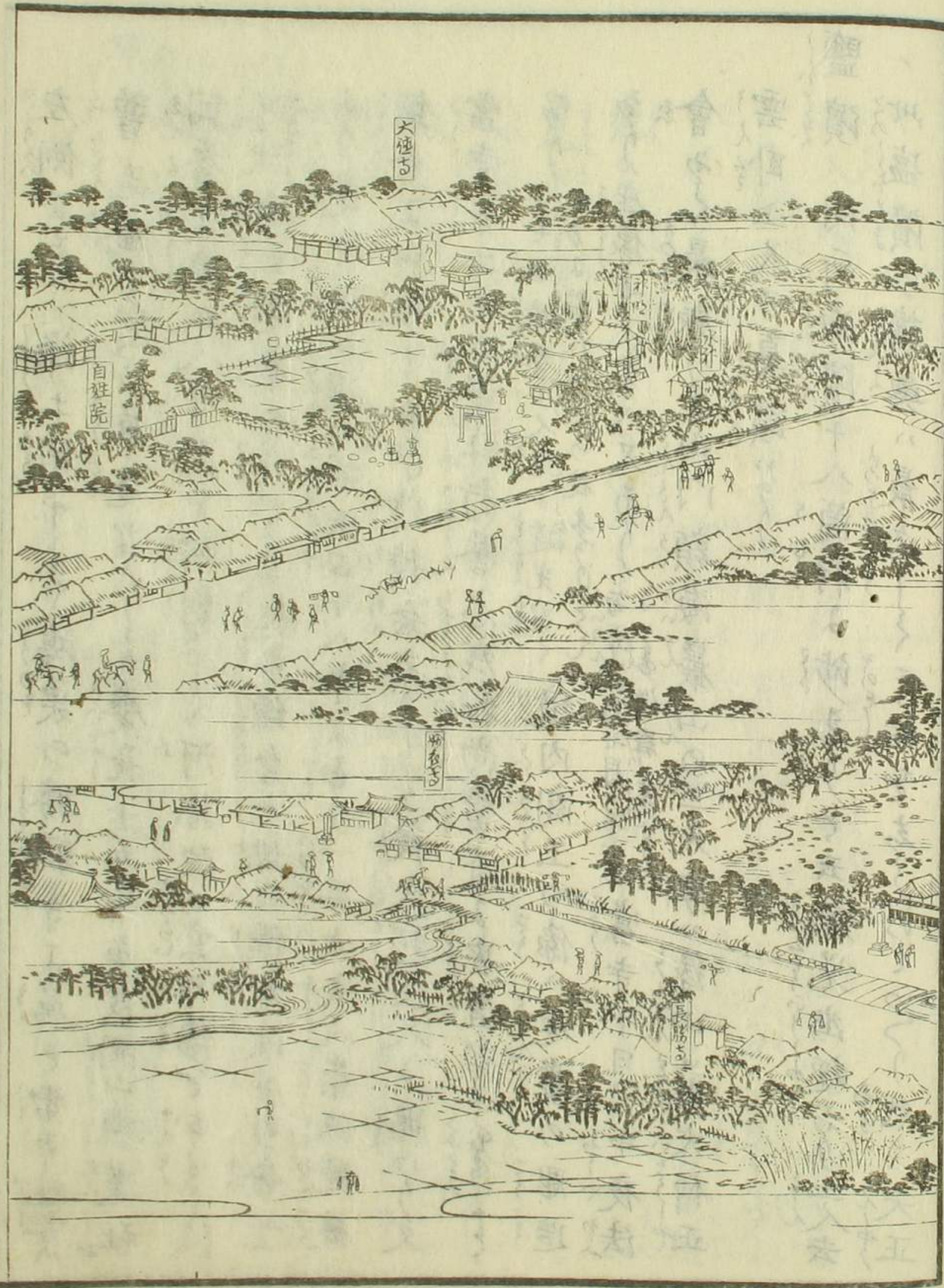
按て葛西志とつる書は行徳ハ金剛院の開山某

金剛院廢址 當寺より南の方あり市杉屋敷と字せり是

則先よつる処の金剛院の旧地なり金剛院ハ羽州羽黒山法

漸寺は屬とつる其昔杉徳有驗の山伏住りてに

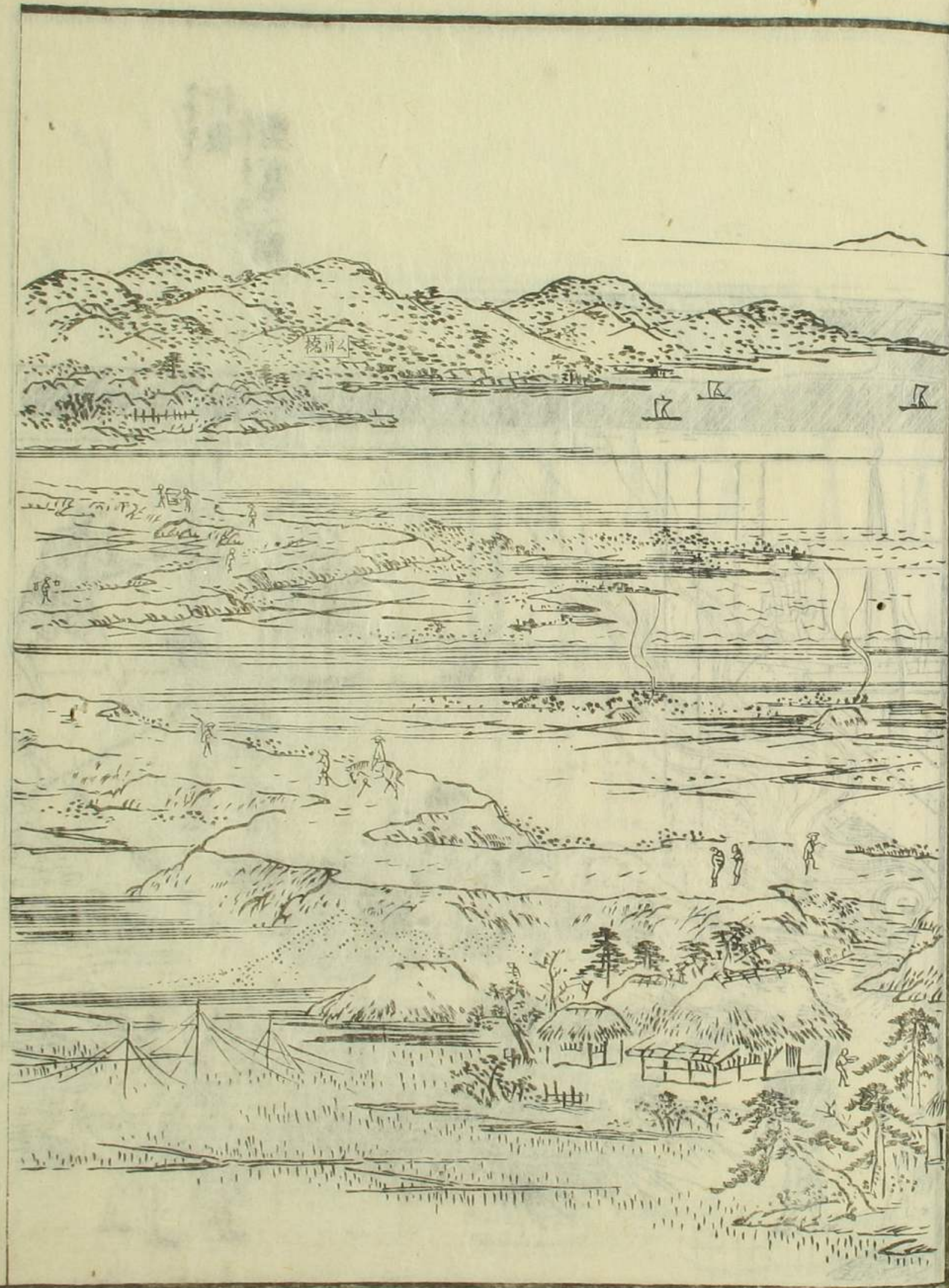
海巖山徳願寺 本行徳の驛中一丁目の横小路船橋間道の



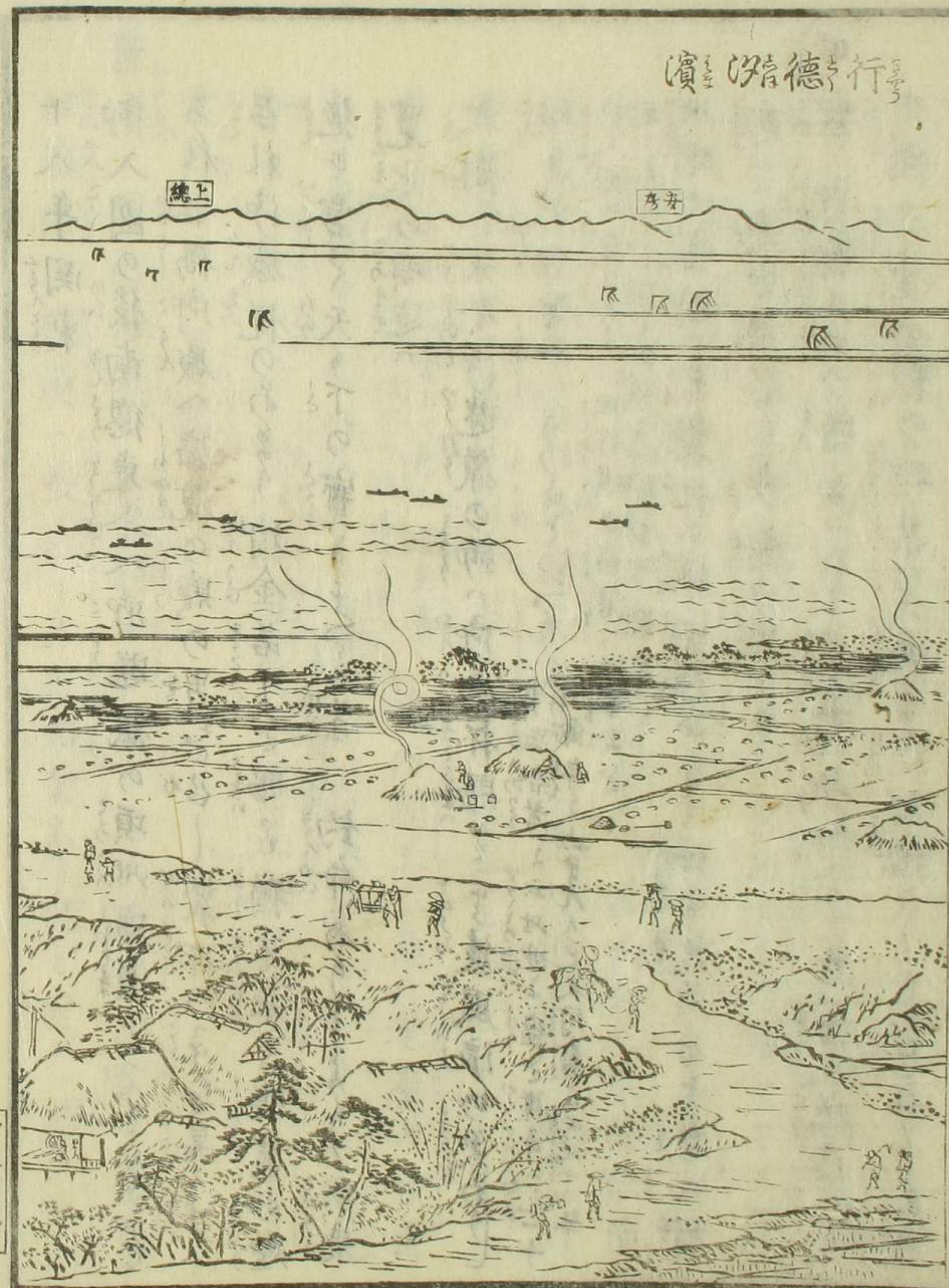
左側よりあり 浄土宗中々々 鴻巣の勝願寺に属す 當寺往古
曾光庵とて草庵なり 慶長十五年庚戌 閑山聰蓮社
回誓不残上人寺院を開創し 阿弥陀如来の像を奉り
丈三尺 佛工運慶の作なり 往古鎌倉二位の禅尼政子の命
あり是を造る 遙の後天正十八年より一品大夫人崇源院殿
鎌倉より移し 妙持念あり 後大超上人に賜り又
當寺弟二世正蓮社行誓忠残和尚當寺に安置なり
十七世晴誓上人殊は道光普く 境内閻王の像ハ運慶の彫造
あり座像中々々八尺あり 毎拜正月七月の十六日 當寺十月八日夜法
會や最賑り 山門額海巖山の三大字ハ縁山前大僧正
雲卧上人の真蹟なり
鹽濱 同所海濱十八箇村ハ涉り云 風光出趣あり 去
此鹽濱の権輿ハ最久しく其始を云ふなり 然天正

十八年 關東

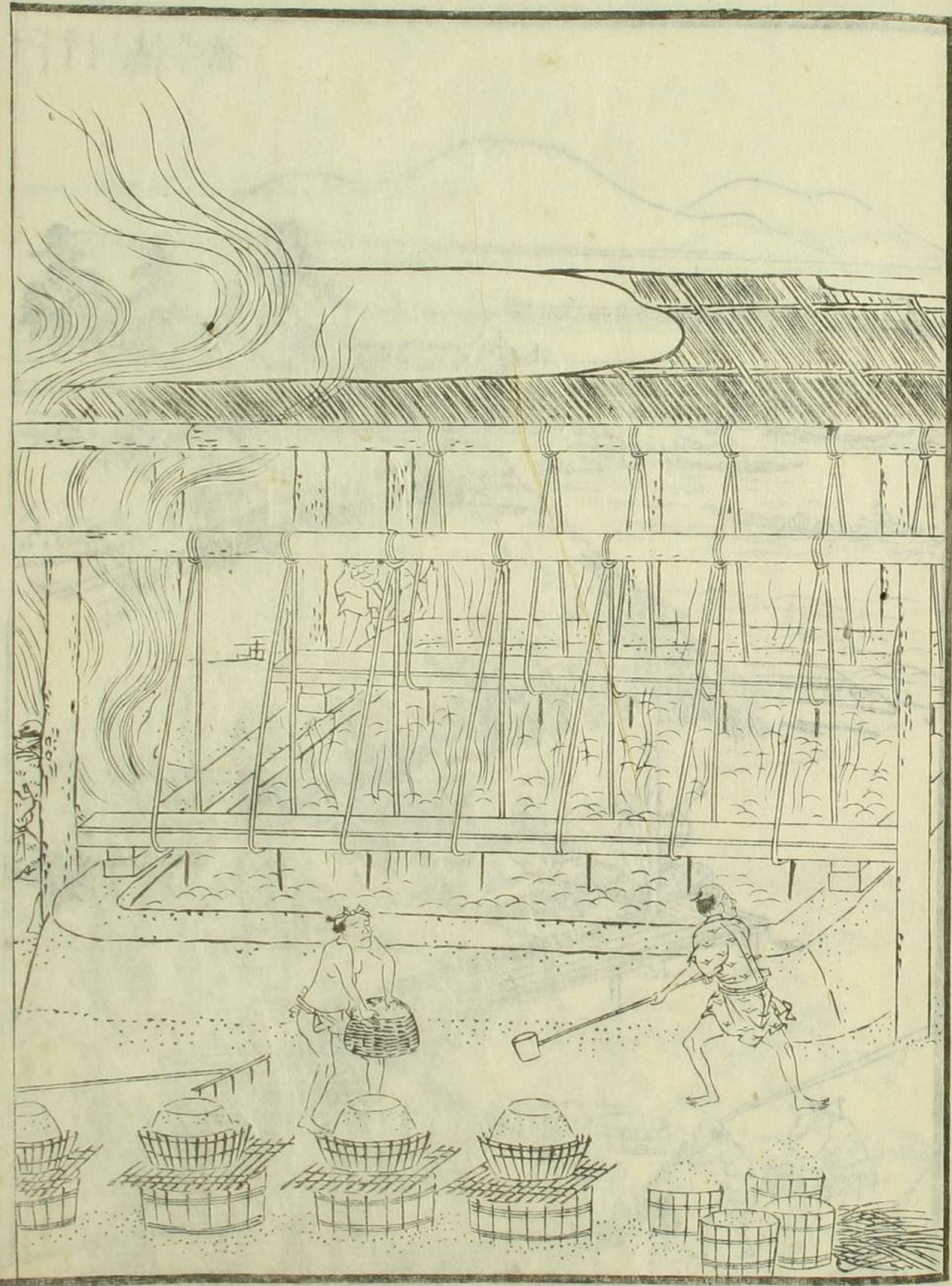
御入國の後南總東金へ御遊獵の頃此鹽濱と云ふかきせ
られ 船橋御殿へ鹽燒の賤の男を召し 製作の事を具し
召れ 沙感悦のあまり 御金若干と賜り 猶未永く鹽竈の煙
絶を嘗て天下の寶と云ふ 釣命あり 以来
寛永の頃迄ハ
大樹 東金沙遊獵の砌ハ御金杯賜り 其後風浪の災あり
頃も修理を加へ 御入國の後日あり 此形徳の鹽濱への船路と
御入國の後日あり 此形徳の鹽濱への船路と
有餘年あり 又同書ハ天正十八年
此地の鹽鍋ハ製地ハ越堅強なり 保る久し 東八州
悉く是を用ひ 食料の用とす
甲宮 行徳入口の繩より 其由来由今知へり 土人或傳へ
云國府臺合戦の時某の大將の堯を紀すと云ふありん 狄



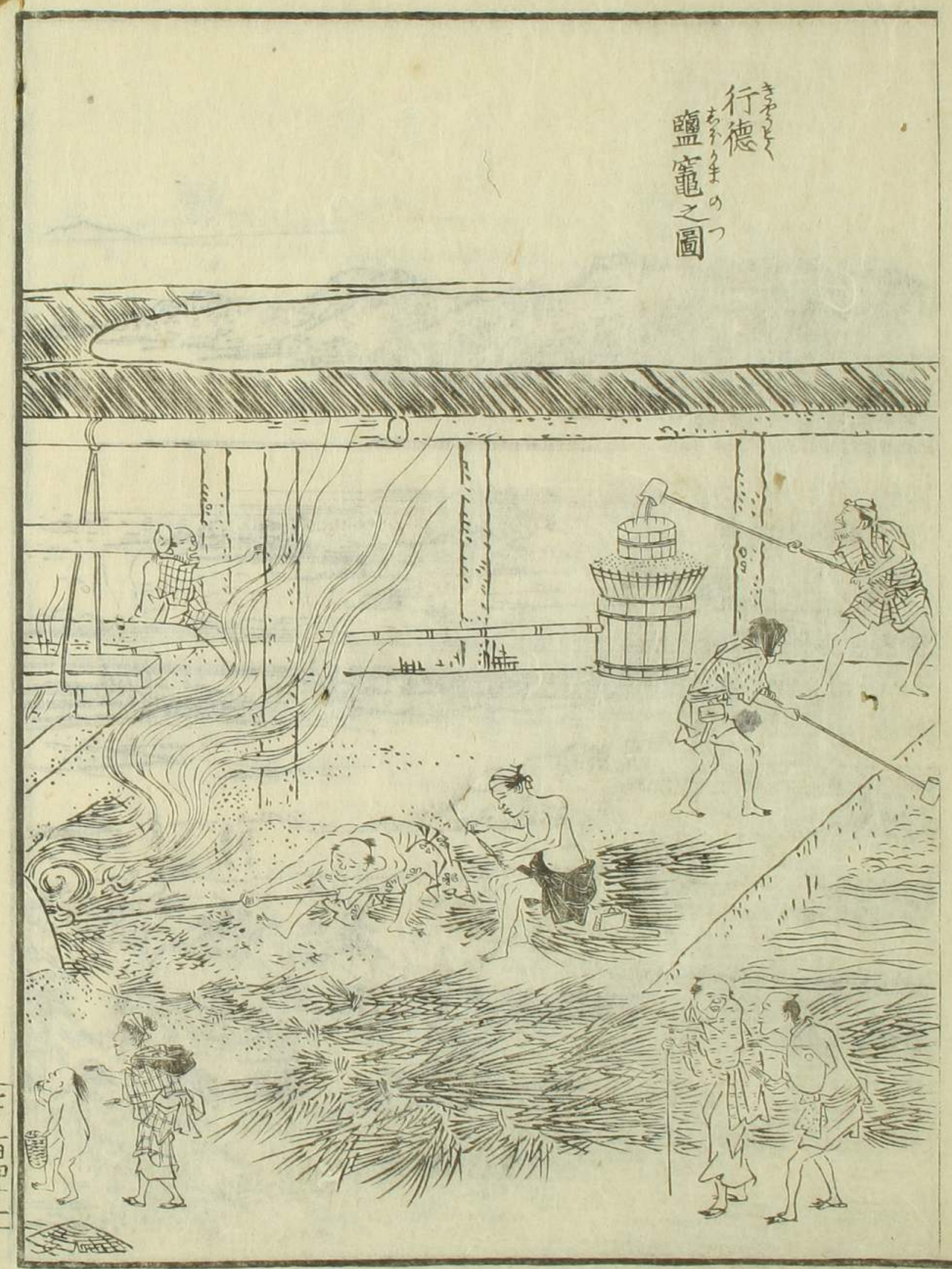
濱以信德行



六面十一

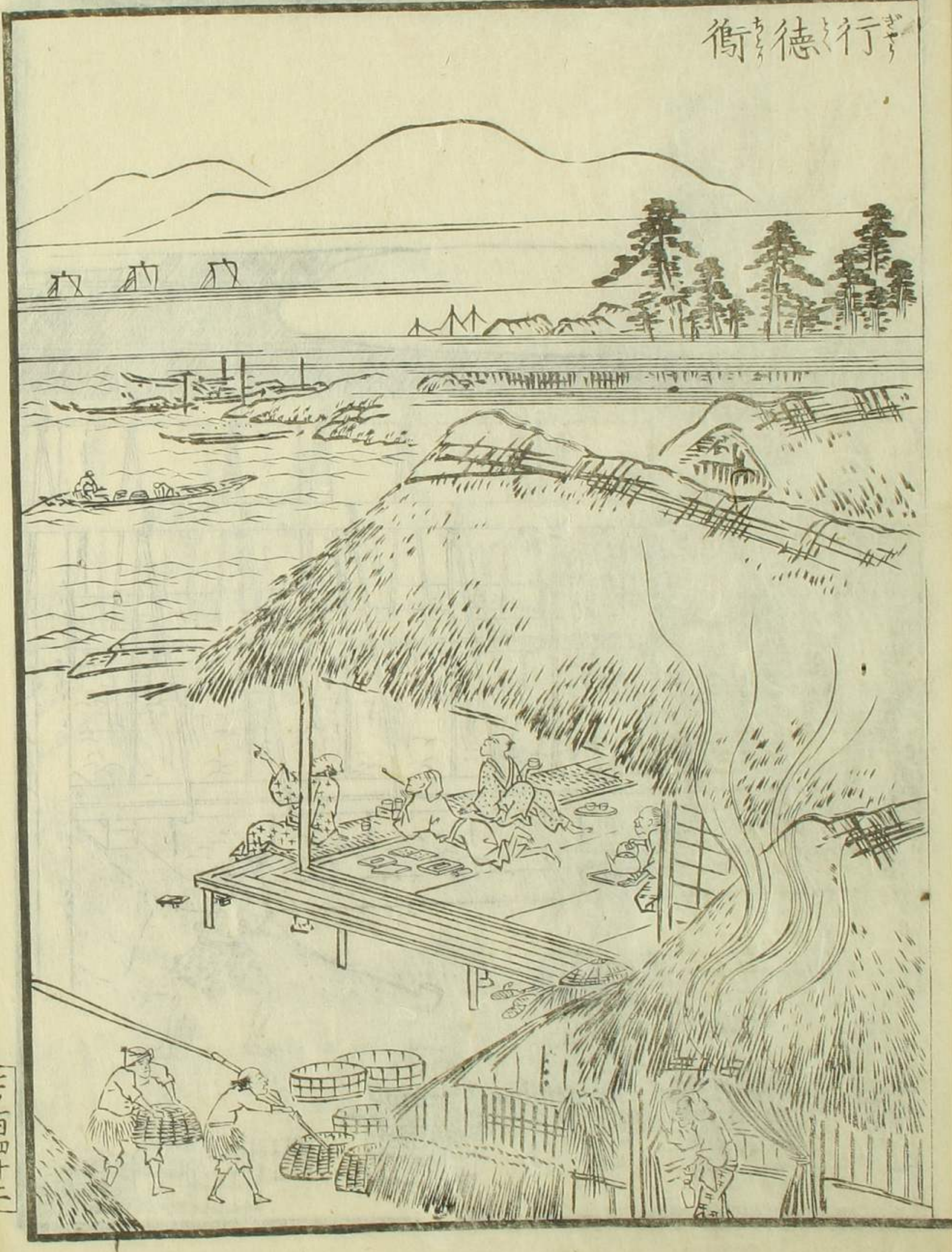


行徳
あぢまのつ
鹽竈之圖





徳行衛



十四日

當社ハ行徳ハ幡宮ノ

別當兼帶記

行徳の東の海濱高谷村浄土宗了極寺

は安を同光大師鏡を照し〜自己の姿をうつ〜 畫あきまり

所影なりとしたり

當寺は唐僧正祐天和尚真子の

塔婆あり 寄持あり

昔此地ハ長島殿と稱せし領主

長島湊 葛西長島と一雙の地あり

靈蹟の廢址あり 相傳ふ太田道灌の頃ハ國府臺の湊ハ船と

泊す其後野州奥州常州徳州等の國々高瀬舟の便利よき

をゆゆるありしより行徳へ運送もさるありしなり

永祿二年小田原北条家の分限帳ハ太田新六郎所領の中ハ葛西長島高

城と云く 萬葉集カ補ハ作り活字板 旧名ハ太井河と云ふ

新

利根川

源ハ盛勢利根江作れり 東鑑等の書ハん

又清浦興義抄云下総國ハ一の郡の中ハ大河あり河の東ハ葛西

嶽の出谷より發し高料川吾妻川鳥川碓井川及ひ信州の

國郡より出る水の諸流合ハ武州幡羅郡に至リ一河となる

又上州渡瀨川ハ利根ハ落合栗橋より分流シ一flowハ北條ハ

入開宿本尾等の地ハ傍々東流シ鉦子より海ハ歸る是を

利根川と号く 一flowハ武蔵下總の前を南へ流レ國府

臺の下を行徳の方へ曲流シ海水ハ歸せり

按ハ侍中群要ハ散位とカ稱し西宮抄ハ大節ハ大夫をカ稱し

と云ハ公事根原云大節ハカ稱し仰ハハカ稱ハ六位と云ハハ

カ稱ハ五位以上の中ハカ稱ハ三品以上ハカ稱ハ四品以上

カ稱ハ五位以上ハカ稱ハ六位以上ハカ稱ハ七位以上ハカ

稱ハ八位以上ハカ稱ハ九位以上ハカ稱ハ十位以上ハカ

延喜祝詞ハ倭國ハ六浦縣能カ稱男也至カ下畧ハカ稱ハ

里長防令ナシモ刀亦ハカ稱ハ古流著副集ハハカ稱ハ

神ハ毎歲正月初午日大頭トシテハカ稱ハ勤む御カ稱ハ

内ハカ稱ハ是を佐とカ稱ハ各六位ハカ稱ハ山城の賀茂ハカ

カ稱ハ後拾遺集雅神延部長能の分の神書ハカ稱ハ

宣旨や祭儀の事ありとあり刀禊と云ふ物冠を稱
揚する辭なきなり是れ其のありきなりと知れり此川は
關東第一の洪河なり關東の所の冠と云ふ意なり刀禊
の俗名後川を西國太郎と云ふは其の意なり關東
と稱するも其の意同なり或人云利根川は上野國利根郡文珠山
皇朝一宮の大河
皇朝文字と借
取らざる例あれハ刀禊を利根小作ともあやむべし

万葉集
刀禊河泊乃可波世毛思良受多多和多里奈美
爾安布能須安敞流伎美可母

神樂註秘抄
篠本

びさのいけささとほりふらふはれいさかた
未

篠のけハ神をそわれぬと篠川のそわれぬと云ふ事なり

此篠のけハの初ハ新勅撰廿九卷の事の中橋仲達と云ふ
入られしり按おはかたりありまの篠川は利根川の
考は扱あふべし

夫木抄
と川の下ハありと云ふ事ありとありとありとありとあり

芳雲集 利根川帰帆
利根川をさうふみさうり

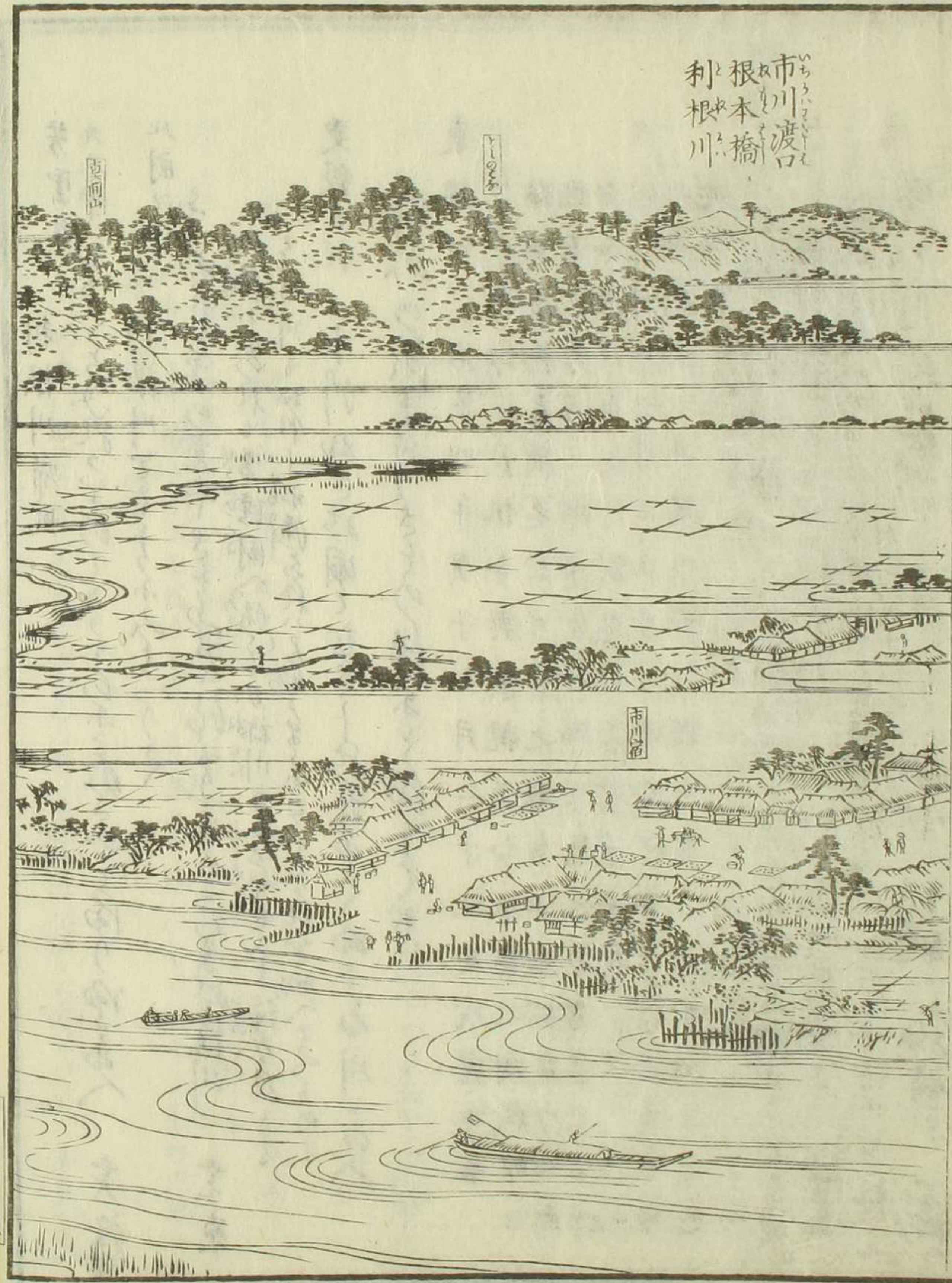
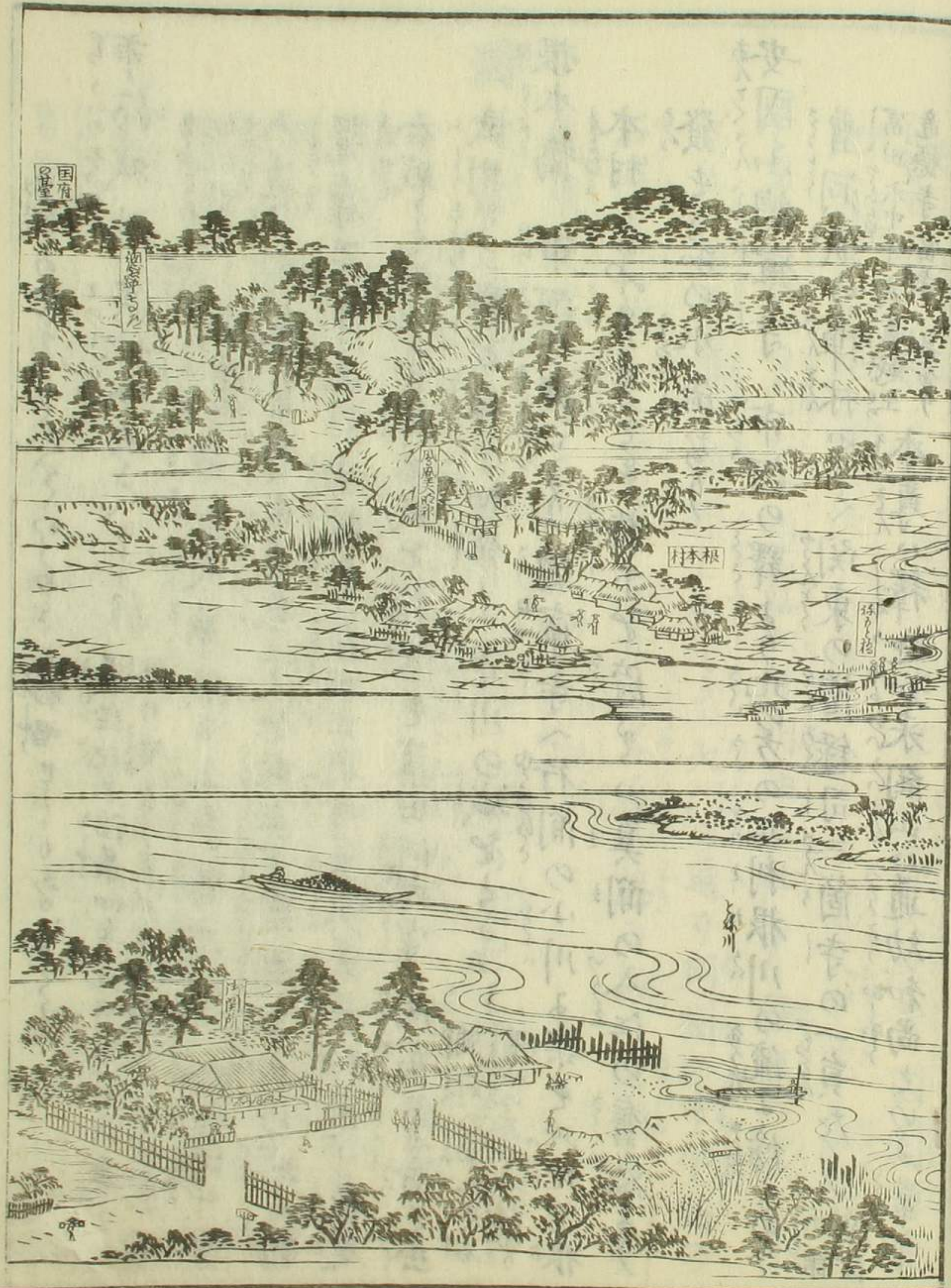
北國江行
利根川をさうふみさうり

更級日記 下川ぬきと國をむきしは既ありと云ふ川と云ふ

かみの淵まの津と云ふと云ふ

東鑑曰 治康四年庚子九月二十九日戊寅中略
江戶太 郎重長依令與景親于今不泰之間試昨日
雖被遣御書猶追討可宜之趣有沙汰被遣中四郎
惟重於葛西三郎清重之許可見太井要害之由偽
而令誘引重長可討進之旨所被仰也下略
又 曰 同 年 十 月 二 日 辛 巳 武 衛 相 兼 于 常 胤 廣 常 等
之 舟 載 濟 太 井 隅 田 西 河 精 兵 及 三 萬 餘 騎 赴 武 藏
國 云 云

迦羅鳴起瀬 新利根川の水流なりと云ふ今其地さうりあり
土人云く柴保の迦ありと云ふ五代後醍醐天皇の系下は武州江戸
より小田原方遠山丹波守富永三郎左衛門尉を殺し其の川を前よ
るくと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり



里佐あゆりつ〜と和唱せしもあへりす

市河城址 其地今あへり

義経紀云治承四年九月十日武藏と下総の境なる所の在市河といふ所

鎌倉大草紙に上杉憲忠より今度中務

入道了心の子息實胤自胤二人を取立下德國市川の城小楯

籠康正二年正月南圖書築田出羽守其外大勢指遣一教度

合戦同十九日終小城を責落を築田河内守八閑宿より打と出

武州足立郡を過半押領一市川の城をとる云云
猶前の弟の卷石
價城の奈下詳なり

根本橋 市河の渡口より總寧寺へ行間の小川に架を此地を根

本村といふより号とを橋下を流るハ真間の入江の舊跡より

發せり糸の水流なり

安國山總寧寺 市河の驛より北の方の丘利根川の流は傍てあり

曹洞派の禪林あり關東の僧録司三箇寺の一負たり
所謂常陸
富田大中寺武藏越生
竜徳寺當寺ハ是なり

本尊ハ釋迦如来開山ハ通効和尚といふ當寺

往古ハ近江國にあり天正三年乙亥北條氏政當國開宿此

地小移をされと屢洪水の患あふあり寛文中竟ハ此地小引

とあり惣門の内右ハ鹽竈六社明神の社あり陸奥の摸なり

といふ大田道灌手植櫃と稱せりハ大門の通り列樹の中下馬の

石碑ハ相對して右の傍にあり又客殿の脇小梅の老樹あり是ハ

道灌親裁る所とて當寺より宗師道正

庵の解毒丸を出せり

國府臺 總寧寺の辺より真間の辺迄の岡をま〜と稱せり

北條五代記云古き文ハ國府臺小竹代嶋岱と云 按ハ鴻臺ハ武

州栗橋の西にありと此地を云ふハ高野臺と書とあると云

府ハ葛飾郡にありと記せり依考ふるハ國府の近き辺にあり

丘山あれハ國府臺といふ号たり〜と云

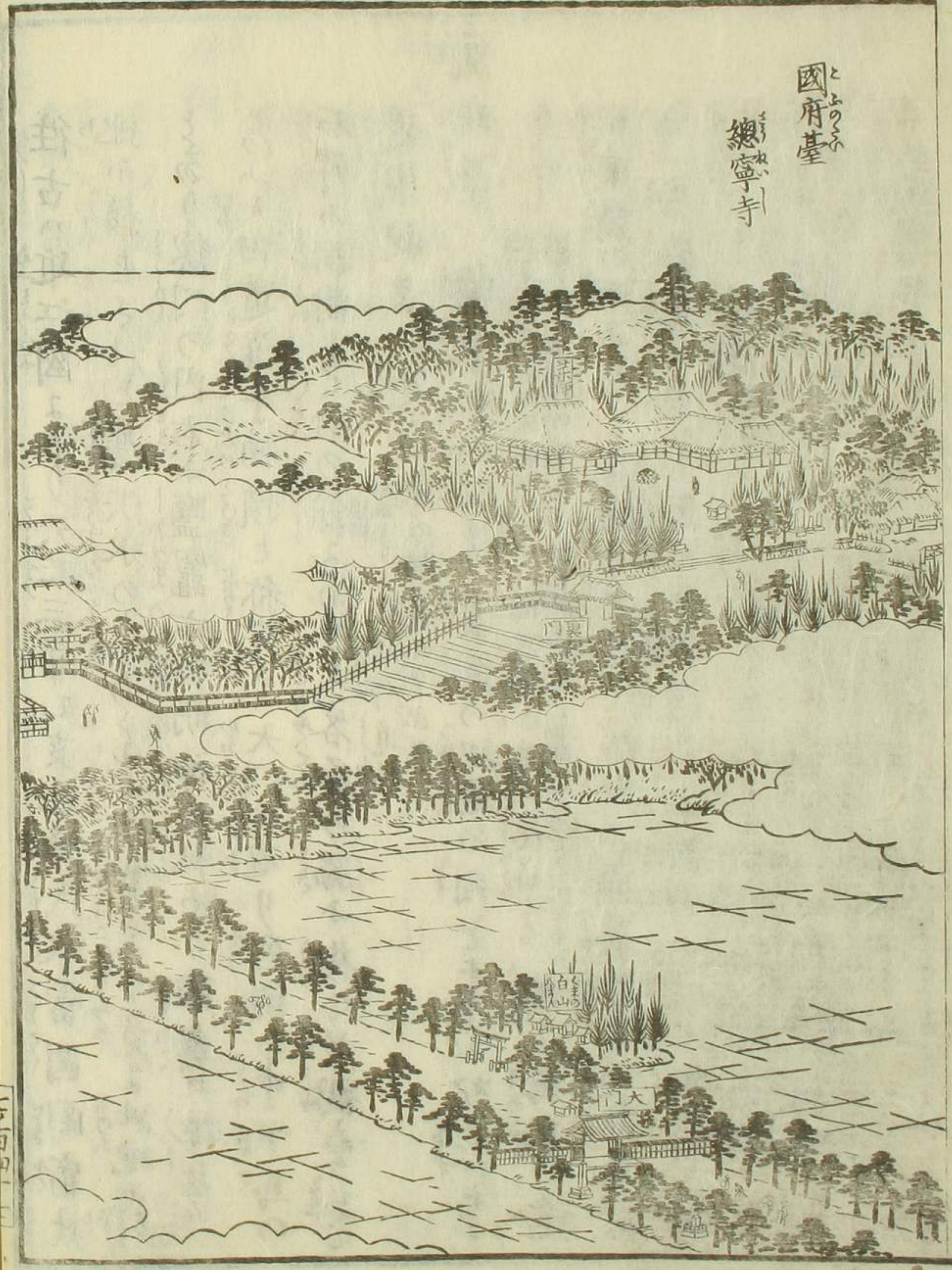
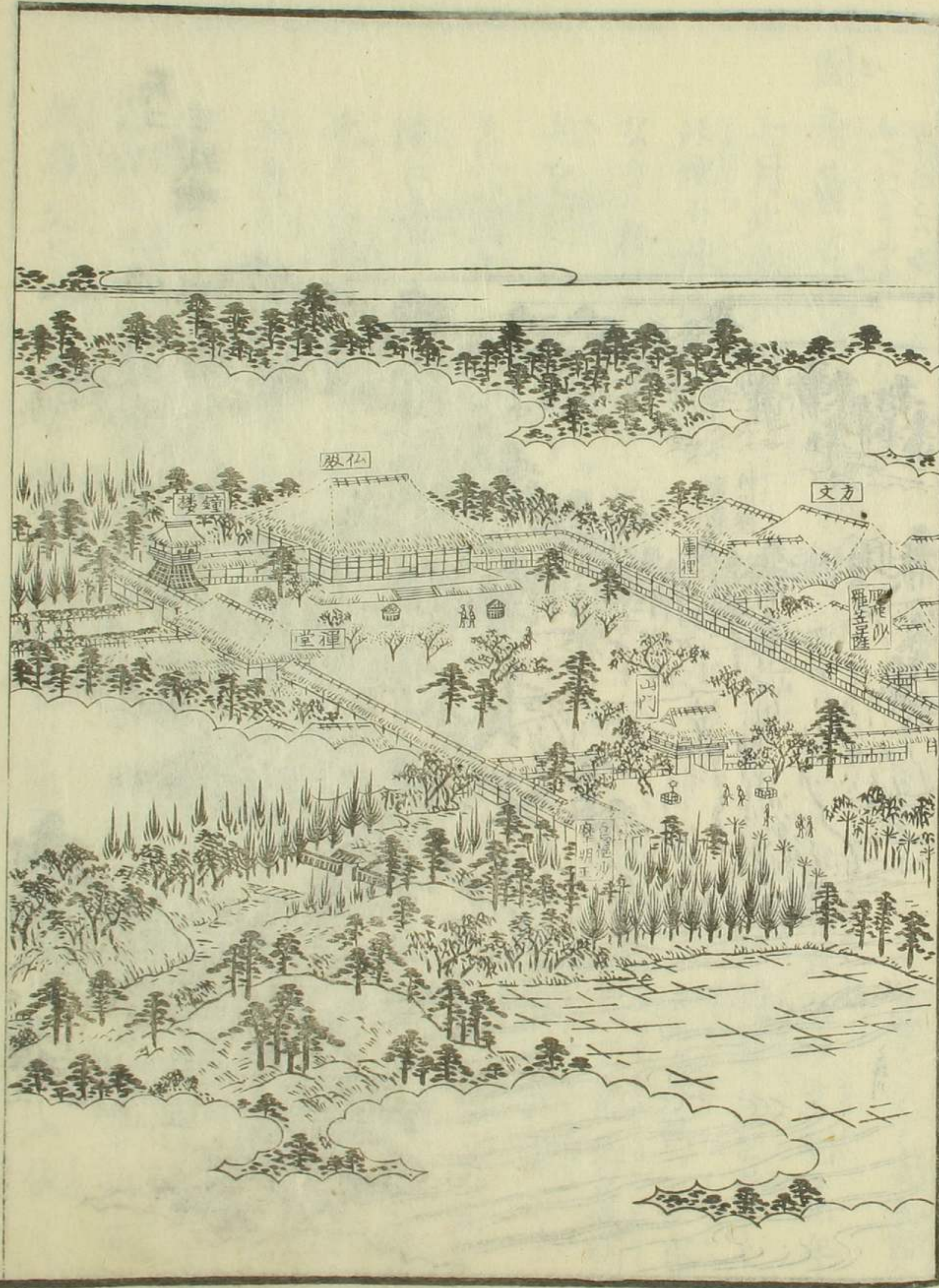
或人云下総國葛飾の府ハ 往古專葛西の地を本府と

世にあり葛西昔ハ下総小屬せり 永正六年の宗長 行東土産 下総國葛西

の府のうちに半日とありと葎ありとありのき 今其の津浄土門 清輔興義抄の文

とありとありとあり 按ハ前の新利根川の奈下小澤とあり 清輔興義抄の文

葛飾郡ハ大郡ありハ利根川と國府を中央小定あり以東を葛東と稱ひ以西



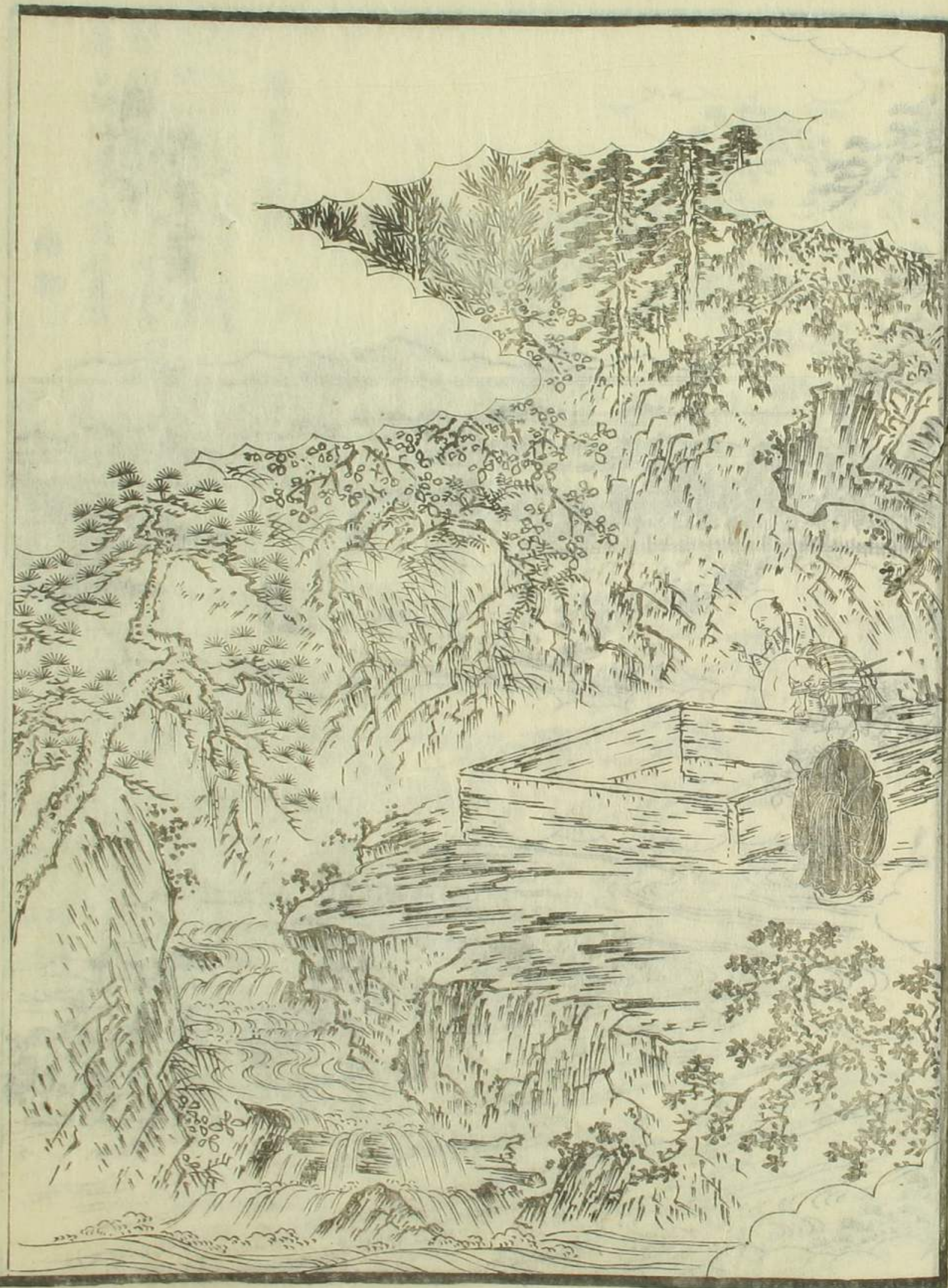
其二
古戰場



國府こ基古戰場

葛西とハ略し一あり一されと、利根川を際りと、葛西の辺こらく、武蔵國へ
 加へたまふゆとハあり一あり

總寧寺の境内まゝ其舊跡なり文明十一年
 七月北總の一揆臼井の城小楮籠りる頃太田持資兵を發して
 此地小陣城を取立件の一揆を攻落し程の究竟乃要害
 なりこれハ天文六年中、或ハ小弓、又作御所足利左兵衛佐義明
 兵を起し小田原を攻んとし、事なると、洩て其聞あり
 乃れハ同年十月四日北条氏綱及び氏康小田原を進發し同五日
 鴻の臺の陣を責る戦ひ利あり、義明父子并舎弟基頼共討
 死せ又永祿七年ハ大田新六郎、義明兄弟の輩小田原小宿き同苗
 美濃守資正入道三樂奔及び里見安房守義弘等と此地小屯
 しこれハ小田原より討手として遠山丹波守同隼人佐をむらへし
 む故ハ太田兄弟相國相違して武州岩附へ落行り然ハ北条
 氏康父子小田原より馳向ひ同年正月七日八日大小戦ハ依る





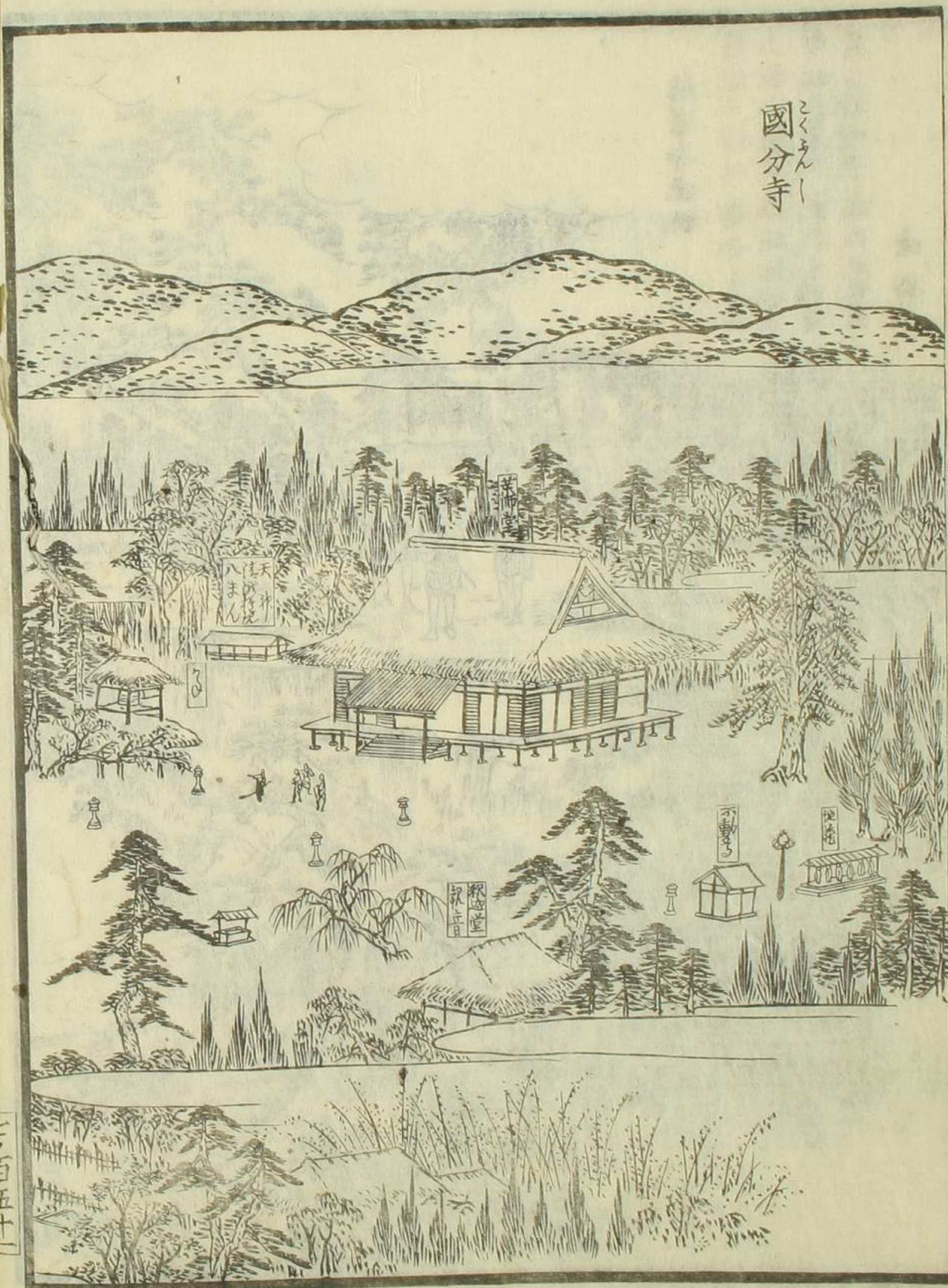
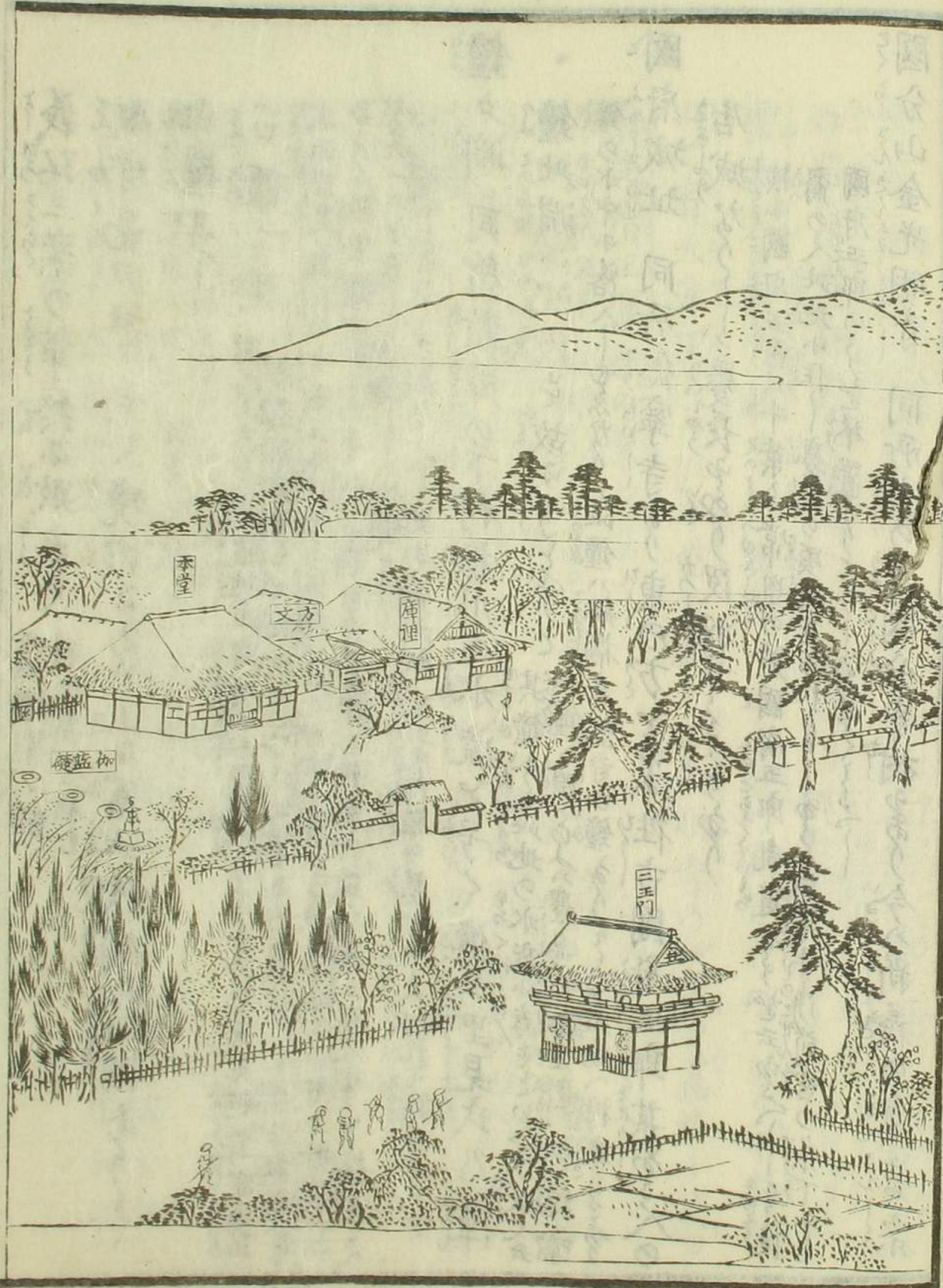
總寧寺晚眺

荒城千仞沒 蕭寺上方閑
 山斷江帆出 踰迴郊樹來
 磬鐘餘鹿野 戰代古鴻臺
 落日斯時恨 臨風起客哀

南郭



國府臺
 斷岸之圖



国分寺

義弘三樂の輩終に敗走す

以上諸書に載る

殿守臺旧址

同一境内にあり上小富士浅間の小祠あり

白檀多し

石櫃二座

同所あり寺僧傳云古墳二双の中北ふよものを里見越前守忠私

或云里見義弘の舎弟正木内膳の石櫃なりと中古土崩れよりとて今ハ石櫃の形地上にあり其項櫃中より甲冑太刀の類あり金銀の鈴陣太鼓其餘土偶人等を得たりと

鐘

鐘淵 同所断岸の下利根川の水流を号く傳云里見氏乃陣

鐘此淵に沈没を故小号とすと

其鐘今此地の水底に存せりと云

國府城址

同所徳寧寺より東の方を以て往古國府五郎某の人の

居城なりし慶長中より没収せしむるあり

按小國府五郎八千葉介常胤の弟國府五郎胤道と云ふと云ふ一説あり其後裔の入此地に住し慶長の頃遷居されり今ハ同卷牛洗前宮の条下中を國府五郎のゆゑと奉置たりて

國分山金光明寺

同所東の邊國分寺村あり今ハ新義の真言宗

中々京師三宝院小庵本尊藥師如來の像ハ関山行基大士の

作脇士の十二神將ハ運慶の彫像なり

堂内鬚頭盧尊者ハ當寺と

聖武天皇の御願中々毎國小置す所の國分寺の一なり中興関

山と省天法印と号し本堂の額小金光明寺の四字を畫せしハ智

積院僧正運叡の筆なり

樓門

樓上小古佛釈迦を安置を関創

釋迦堂

本堂の右小あり釈迦の像

天王の像ハ上古の物なり其奇古なり其餘古佛像多し續日本紀ハ云聖武天皇普く天下を釋迦牟尼佛の金像高一丈六尺者各一鋪を造り并大般

小田原北條家制札一通

興小子三月十四日遠山左衛門を記しあり

古證文二通

二通とも天正十三年乙酉二月三日とあり一ハ關則と注し花押

とあり其文中ハ十二坊のあり近き頃ハ其十二坊存せしと云ふ今ハらく廢せり

古笈一

権大僧都觀學院慶長六年と彫あり

延喜式主稅式目下總國公廨各四十万束國分寺

料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

藥分料一万束下畧

鏡石

真間の弘法寺より
國分寺へ移方の
田畔石橋の傍小
溝の中あり夫云
此石根地中不入
其際をあらす
依要石とも号く
るあり



當寺往古ハ伽藍魏々ありともありこの星霜を経く大小衰

廢一今ハ昔の方一を存せしむる當時の礎石と稱するもの堂前小

あり今の寺境ハ大田道灌の頃の陣屋の旧跡ゆへ古の寺境ハ乾の

方ありり今ハ畑とあり

内膳山 國分寺より東の方一丁計を隔てる丘をいひ往古里見

義弘の舎弟正木内膳の陣營の地とありといふ

鏡石 弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中あり

此石根地中不入其際をあらす故小一必要石とも号くといふ

主人此石橋ハ國府其基あり石棺の蓋なる由云傳ふ

持國坂 國分寺より真間へ行方の坂をいひ古ハ此地ハ國分寺の

四天王の内持國天の堂舎あり一故小号とせといふ

真間山弘法寺 國分寺の南あり

一七六門家と稱する所の其一員なり日頂上人を以て開祖とせ

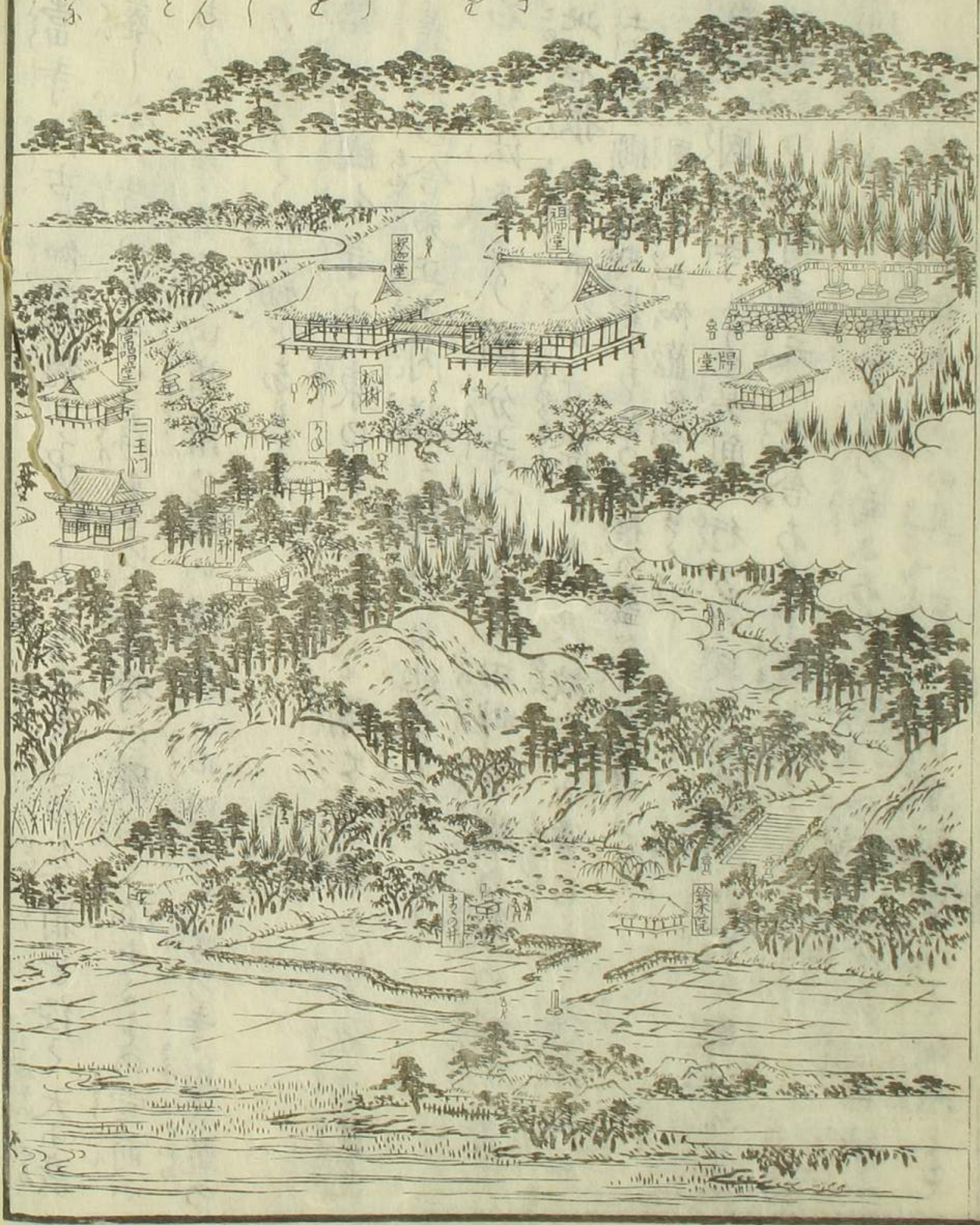
市河村日蓮大士弘法の地ハ

真間
弘法寺

我身ハ
ゆゑ
の
まの
橋
日蓮



入重
玄門
倒修
の意
を
こゝろ
人々
と
せし
後



日蓮

其二



七百五十五

本國院日頂上人ハ六死僧の中にて伊豫阿闍梨と稱せ富本常忍の子ナリ文永四年
 丁卯日蓮上人ハ就く得度也弘安五年壬午上足の第五とある日蓮上人の滅後守峯居士
 と管庵にて本國院と号す其ハ山本坊と稱せ正安元年己亥父常忍寂のの後哀とつ
 くく八月十二日亡き出去り終つたなり依示寂の年月其終焉の地をあるす
 寺院をのつたなり本堂を釋尊の像を安を富本常忍音
 造り當寺ハ奉安也日蓮上人時頂師と祖師堂ハ其右小並ハ内小宗祖上人の
 して點眼せり負の書を賜ふ
 像を置此像ハ日法上人の作なり支院十餘宇各磴道此下に
 列を大門ハ松の列樹中々六丁程あり

楓樹 秋庭堂の前あり今ハ枯株となり其形を存するのむろハつり四五丈小
 遍覽亭 古文の構のありあり額ハ遍覽亭と題せ黄檗千呆和尚の筆跡
 此所ハ山崖ハ臨む知ハ西南を眺れたる葛飾の村落眼ハ下あり
 江ノ大城甲相の群山雲ハより霞ハ横らるる又ハ房総の海水遠く聞け
 実ハ千里の風光を野へり
 樓門 石燈の上ハ簷ハ左右の金剛力士ハ工運慶の作なりとあり全餘黒色ハ
 一と他ハ異なり樓上ハ掲る額ハ真間山と題せ弘法大師の親筆なりとあり
 當寺往古ハ真言瑜伽の古刹なりとあり日蓮大士此地ハ遊化の頃
 寺僧大ハ宗意を論じ竟ハ大士の化導ニ帰依し宗風を改
 轉せりとあり
 或人云西新井邑総持寺ハ安も余の弘法大師の像ハ
 當寺改宗の頃かこ進しまぬせりと云日統秋曰了性

真間の弘法寺住持を或日日常と問答を屈と請う逃し日常衆徒を化す等因之杖化の道場と云く又先徳記を考ふ東河田谷天台宗の中より性云あり本文宗祖上人と問答せし住侶の名を住さそをく此子性云あり

當寺 什宝多きう中を宗祖上人及び諸徒の真筆の曼荼羅消息の類ひ教通あり悉く挙ふ不違每歲九月九日より十八日迄法華經千部讀誦十月十三日ハ宗祖上人の忌日たるあり御影供と修行せり近在の道俗群衆を

真間浦 同弘法寺の前の水田の地を勝鹿の浦といふ

此所のゆを云ふ一 土人云昔ハ真間の崖下も浪打寄たりと云ふあり所謂大洲ハ初々洲あり所あり立野ハ芦を刈りて陸地とあり一云あり芦畔といふを萱野中々水田を開墾せしむと

万葉集 可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈

妣等佐和久奈美多都良思母

夫木抄 真間浦の浦の沖は海あけの海かちあり 俊頼

續後撰集

真間濱 地ねーありそいあふー 道隆

夫木抄

真間入江 是も同一辺なるれも今ハ耕田とあり又ハ民家林

藪ふ沿革して古よ違へと

万葉集 山邊宿禰赤人作

勝牡鹿乃真々乃入江爾打靡玉藻薊兼手兒名

志所念

續十載 忘れかまの入江をのち朽なる社の志すともんよ 為教

夫木抄

日 かりそめれまの入江のむかへそこととらまれば行へとあり 光俊

真間於須比 仙覺律師の萬葉集抄云於須比ハ山をひふといふ

於思敬爾とありわねく 後述ありと本居宣長翁の考へて手古奈、後述ありしハ浪さめとさきとの意ありとありと後述あり

可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻未
乃於須比爾奈美毛登杼呂爾

真間繼橋

弘法寺の大門石階の下南の方の小川に架を所乃

あつ川の橋の中ある小橋をさしてなり
或人曰古ハ兩岸より板を中梁より打ちけり故に継橋といふ

万葉集

安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻
未乃都藝波志夜麻受可欲波牟

新勅撰

風雅集

猶麻也昔のまは此終橋をいれすこころまうはこころ那 兼円

同

五月百餘り波はかひくやう川さうさうさ間終橋 雅徑
かひくはまの海風吹あかり夕波越るよとれつきをー 朝村

按朝村の和奇ふよとのつきまーとあま水の灘ふくけうとふ意あり山城の邊とハ異あり

入重玄門倒修凡事の意を

うふくを波いさんとせし種ふあまをよとのまは終橋 日蓮

真間手見名舊蹟

同所繼橋より東の方百歩をうふあり手見

名々墓の跡なりとのみ後世祠を営てこれを奉一手見名明神

と号に婦人安産を禱り小兒痘瘡を患ふ類ひ立願して其

奇特を得とより祭日ハ九月九日あり

（云）文龜元年辛酉九月九日此神弘法寺の中興弟七世日興上人の靈告ありあつてこゝに崇めたりといひ春墓文集繼橋記ハ手見名のつを載りといふ其説里諺あつてこのまゝ證とせしむ足らざる

清輔奥儀抄云 是ハ昔下総國勝鹿真間野の井ハ水汲下女

なりあまは麻き麻衣を着てささく水汲其容貌妙あり

貴女ハ千倍せり望月のめく花の咲うめくあま立ると見人々

相競入る夏の虫の火入る如く湊入の船のめくなりこゝ女思ハ

あつ川に一生のそくあまを存く其身を湊ま投 中畧

又かひくはまの海風吹あかり夕波越るよとれつきをー 朝村

継橋真間の浦真間井真間の野なとよめるこれ此あり

云々

万葉集 過勝鹿真間娘子墓時作歌 山部宿禰赤人
古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻
問為家武勝牡鹿乃真間之手兒名之奧擲乎此
間登波聞杼真木葉哉茂有良武松之根也遠久
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間間能手兒名
之奧津城處

詠勝鹿真間娘子歌

高橋連蟲麻呂

鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絕
言來勝牡鹿乃真間乃手兒奈我麻衣爾青衿着
直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎谷
不看雖行錦綾之中丹褻有齋兒毛妹爾將及哉

望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入
火之如水門入爾船已具如歸香具禮人乃言時
幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音
乃驟湊之奧津城爾妹之厨勢流遠代爾有家類
事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

下總國相聞往來歌

作者未詳

可都思可能麻末能手兒奈乎麻許登可聞和禮
爾余須等布麻末乃氏胡奈乎

真間井 同所北の山際鈴木院とのみ草庵の傍あり手兒奈
汲る井ありと云傳の中古此井より靈龜出現せし故に亀井

梨園

真間より八幡へ
杉道の間に
あり二月乃
花盛ハ雪を
敗より似たり
李太白の詩
小梨花白雪
香と賦しる
後あり



ともいふなり
此の鈴木院と云ハ北条家の臣の俗稱と云々
石塔ありこれ同修理と云人遺立
按小寛文八年戊申相州鎌倉鶴岡修造の時の工面と鈴木修理長常と云
然時ハ番面の家なる人牧雀岡梁牌ふかく載るれとも又別の人名を推考ベ
万葉集
勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

葛飾八幡宮

真間より一里あり東の方八幡村あり
常陸并房総の海道中

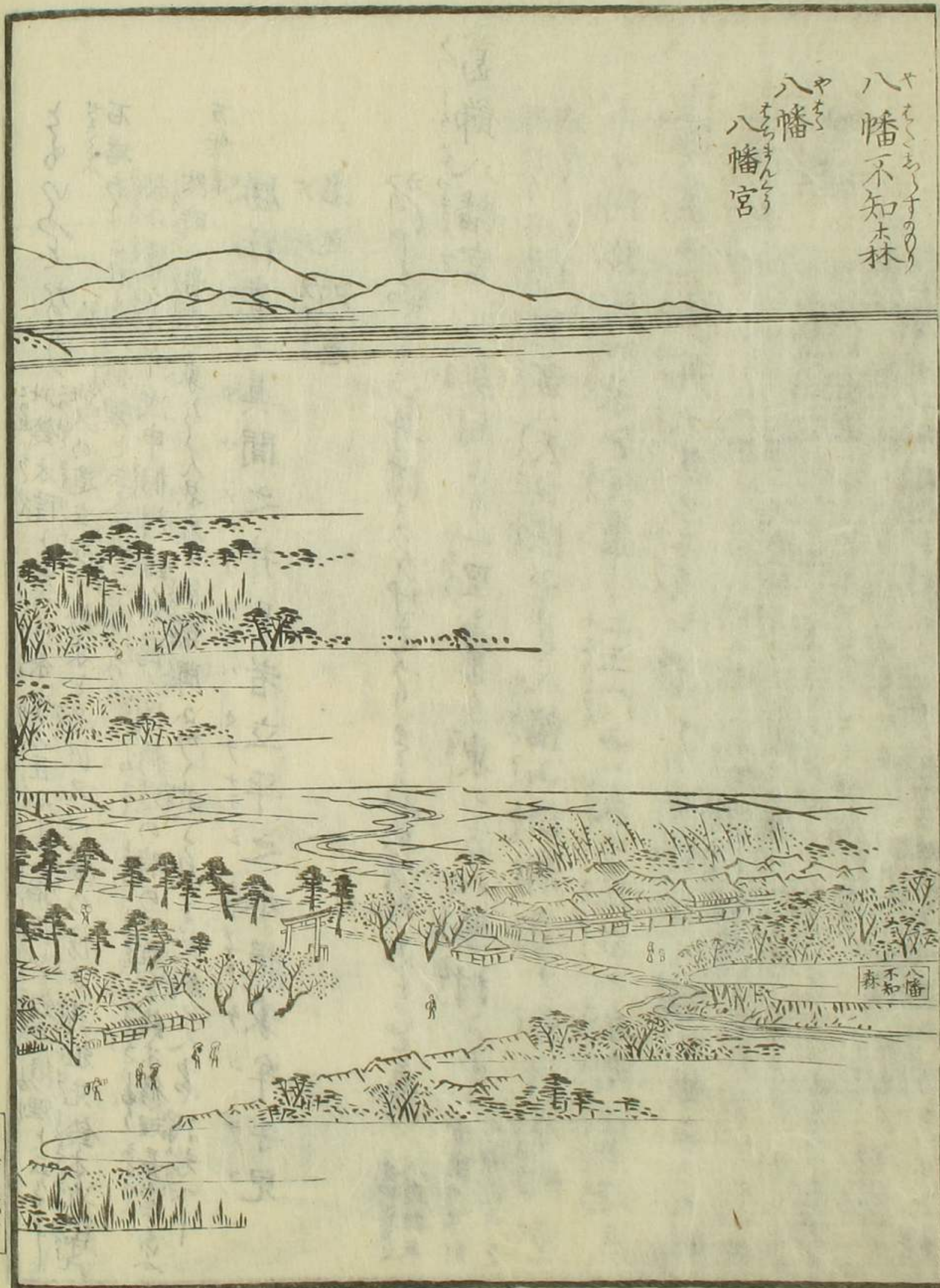
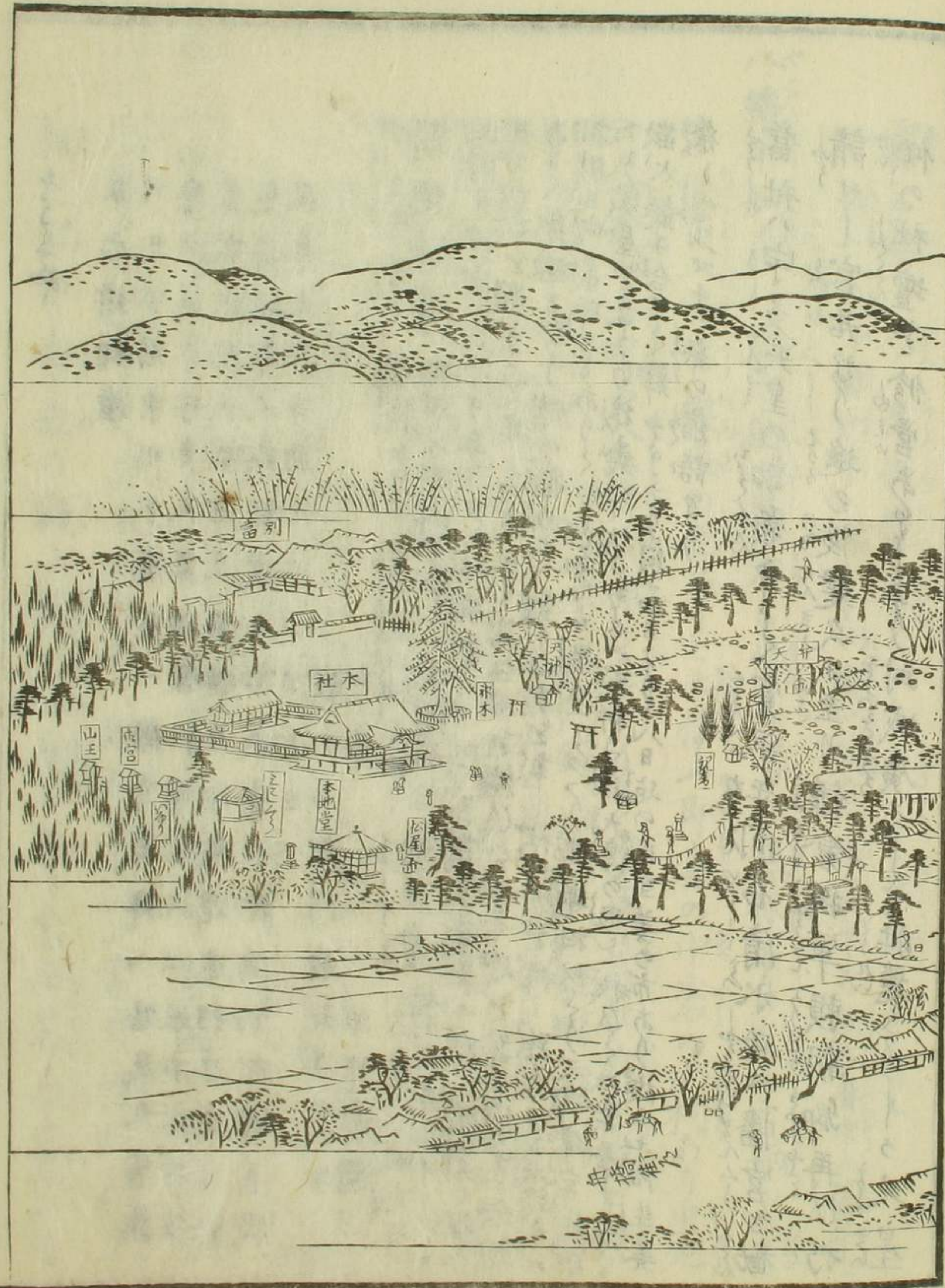
別當ハ天台宗あり八幡山法漸寺と号ハ本地堂

像裏ハ多聞大黒の二天を置り神前右の脇ハ银杏の大樹

あり神木とす
此樹のうろちの中ハ常小蛇あり毎年八月十五日祭礼の時音楽

古鐘一口
寛政年間枯木の根を穿ると是を掘り其文三尺七寸あり竜頭の

按小應永の鐘の銘ハ永の項乱世を恐れ土中へかき埋め多時其年号月日を刻



きんぎょ

奉右鑄銅鐘
大日本國東州下總第一鎮守葛飾八幡是大菩薩
傳聞寬平宇多天皇勅願社壇建久以來右大將軍
崇敬殊勝天長地久前橫巨海後連遠村京虫性動
元亨元年辛酉十二月十七日
願主右衛門尉丸子真吉
法印智圓

筒粥神事

每歲正月十五日的朝此神あり
放生會 八月十五日修行す
其年の豊凶を占むる新指多し
此日神輿渡せしむる

又同日津宮といふあり夕七時頃當社の社人集り華表の前は幡のめぐり長き
掛の白布を巻く建上の方より其白布を結ひ合せく足をかき代り念願
ある人身證あり伴の楹の上へ登り四方を祈り社の方を祈り下は此行す
相州日向菘師ありありと推登し其趣相似たり又其津宮社の
下は樂屋をまうり社裏扉社ありありの獅子舞大鳥の形を救ひく此樂屋より興く
歡太鼓合せく舞ありあり同十四日より十八日迄の間生姜の市あり故に土俗生姜
祭と唱へマチ八祭の俗語なり

當社八宇多天皇の勅願なり寛平年間石清水正八幡宮を勸
請せし宮居あり遙の後建久小至り鎌倉將軍頼朝卿再し
傾の社壇を修營ありより封域廣く壯麗なり又星

霜を笠

今ハ老樹鬱蒼とく上久々林垣とあり

按小當社ハ國分寺小同く一國一宮の八幡宮なり往古府中置れ

八幡不知森

同所街道の右に傍る一ツの深林あり方二十歩よ

す往古八幡宮鎮座の地なりと云傳ふ即森の中石の小祠あり里老

云人謬く此中ハ必神の崇ありと是を禁む故小垣を繞

りてあり或云む平親王將門平貞盛の矢よあり秀郷の討れ後

入て働を終り土偶人と頭れり其後雷雨破壞せり此地を踏者あるハ

必たりありと大不驚怖せり又或人の此森の面帯はこく心幡の地ハ

地ある幡の幡ありとハ字せしむる

因に按ハ幡の幡あり中山什室の内應永二十七年千葉介兼胤の

證文ハ下從國八幡庄本妙持法華寺弘法寺三所寺勢職云同在曾谷

曾谷妙見尊

曾谷村長谷山安國寺ハ安置せり當國千葉寺妙

見尊と同木あり其末木を以て彫刻をといふ當寺境内に王

義之宮あり華表の額に晉王公廟とあり烏石葛辰の

義之宮あり華表の額に晉王公廟とあり烏石葛辰の

傍に石碑を建つ何の得れなきやを知らず

高石明神社 八幡より東の方佐倉街道鬼越村深町の入口道より

左の岡あり別當八日蓮宗あり泰福寺と号に祭礼ハ九月

九日なり土人傳云當社ハ里見安房守義弘の弟南總大多木

城主正木内膳亮時徳の墳墓ありと云り

神體ハ劍を帯せ馬上軍神の像なりとの

注進の状ハ幡庄内あり高石神村の地を寄附せしあり又同年二月同胤貞祐

安房須明神社 同所中山の北池田とのあり北の岡あり傳云

里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりとの

今淡島明神と云 今様抄の

北条五代記ハ里見長九郎弘次生年十五歳初陣なりし時

花馬小乗母衣を

かけ強を持きた一騎もろろ落後と相模國の住人松田左京亮康吉追うけ細く

落し既首を取むとせしと容貌美麗なり花の如き少年なりしと云

かと思ひしと味を霞の如く起來り首をさしと云

落しされと云

引前ハ勝る故なりと云

葛飾志云昔かゝの浦ハ鹽賣とのあり或時此浦を通りし

道端ハ古き稻獲の

為愛ハ惜りしと云

壯子ハ生れしと云

苦止時なりしと云

來りしと云

此時既ハ七月孟秋盂會中ハ

下ハ居らし牌前ハ供さしと云

然ハある日家の内ありしと云

中ハ蹴地と云

されと云

正中山本妙法華經寺 船橋街道の左側あり

日蓮大士最初轉法輪の道場あり一本寺なり

岡山八日常上人

此地と中山

村あり

中興八日祐尊師

鎌倉大草紙云十葉介貞胤父の宗胤三井寺にて討死
せし後此國落進宮方老新田義貞の法供たりしと云
る乃ち依る氏の味方ありぬ弟貞貞宮方老新田義貞の法供たりしと云
法苑の学道あり下徳國中の法苑経持の中興開山あり是より中興上人
堂建立あり五重の塔婆を建ちし後貞貞宮方老新田義貞の法供たりしと云
中興の時に依りて九州へ下り大隅守に補任し肥前國を治り西征將軍の宮の
九州へ下向し肥前國松玉山を建立して徳州の中山を引未代迄此所と中山と西
一寺と号せしあり

祖師堂 日蓮上人の像を安んず 日蓮上人の像を安んず 祖師堂 太虚庵光悦筆

祈禱堂 同所後の額 祈禱堂 筆者不知 法華堂 洞左ふかふ大七手刻の

置此所大田東明の宅地なり 兼明日常上人の教を受自の宅地を轉して佛宇と
正中本刹寺と号せし此堂六其項宮建ちし所の傍なり 世俗云飛騨匠作す

あり當時宗祖大士最初擲法 額 光明法花經寺 光悦筆 堂内外障の家帯
輪法華説法の道場なり 宗祖大士より常忍へ贈りし所の消息の写しを板に書く掲ぐ其文云く

宗祖大士より常忍へ贈りし所の消息の写しを板に書く掲ぐ其文云く
沙四寶をもちて一回浮提才一の法華堂造りてと靈山浄土よまなりといふ
時八申あけさせしと云く

進上 蜀博入道後 日蓮判
十月廿二日

眞書八宝庫小収む世に後四寶を遺すと云はれしなり
鬼子母神堂 同左ふかふ大七手刻の額なり
鬼子母神の像ハ宗祖大士の作中々往古大士常忍建立せ

法華堂 在せし頃一尊四菩薩の像と共に彫刻ありしと
なり 毎月十七日の夜遊在りし道俗奉養す 経蔵 祖師堂の前
左の方あり
竜淵橋 堂前の流に常昌堂 寮舎あり常は
眞間私法寺の開山日頂上人ハ日常上人の子なり父の脚氣と云く思願を
祝し能く故に此樹の下に幾回も来りて哭てを帰られしと云く此号ありと

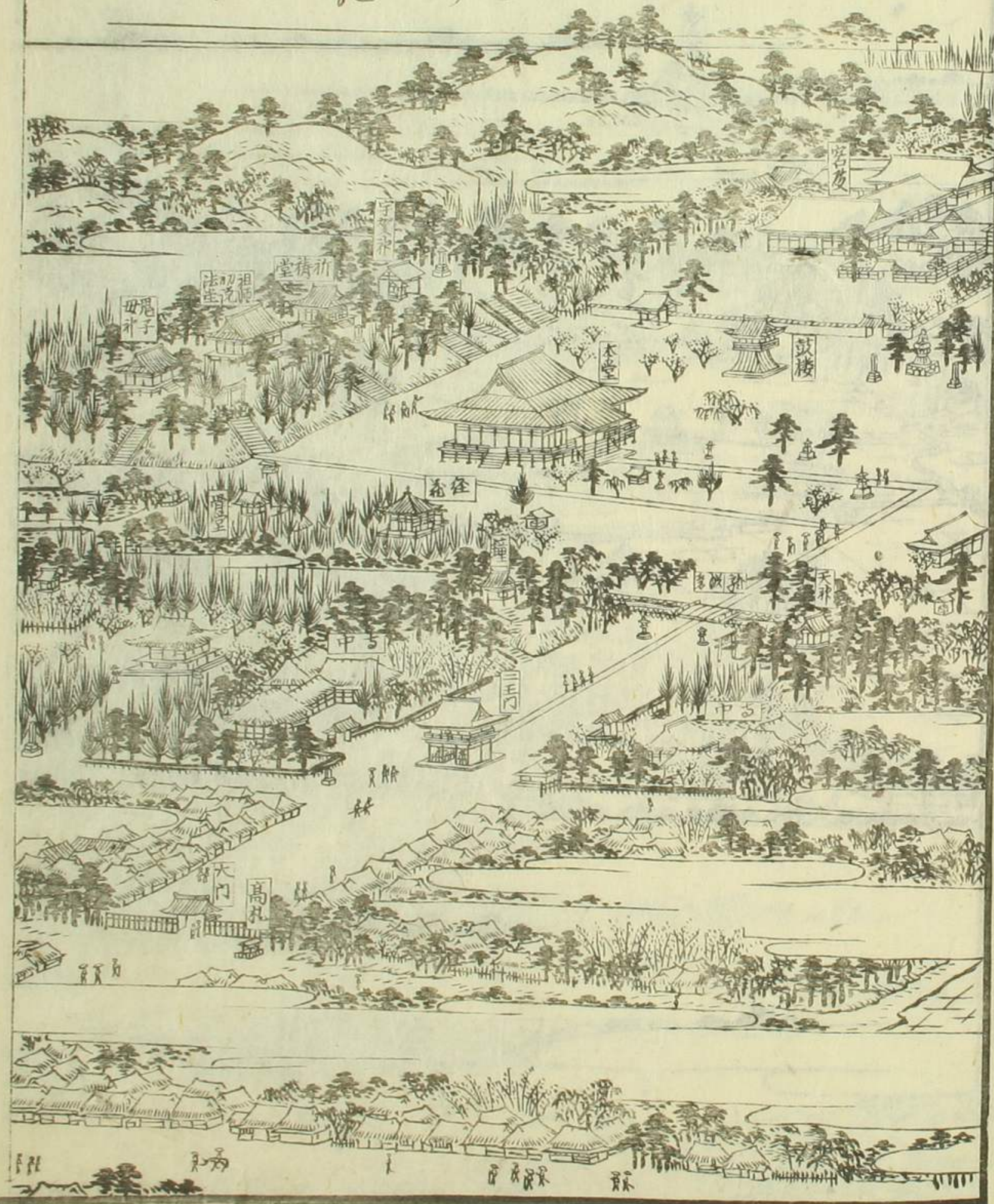
五層塔 同左ふかふ大七手刻の額なり
於小室より所あり當山の護法神とて
毎季十一月八日火焚祭を修す 寶庫 法苑書院の奥の方あり 宗祖大士の
支院三十六字 今破廢せしものあり 二王門 額 正中山 日等上人筆

或ハ光悦の筆なり
中興開山日祐上人墓 徳門より内左の方小路を入る二丁を過ぎ酒の於山の中
あり 當山第二世時高上人の墓も又此所あり

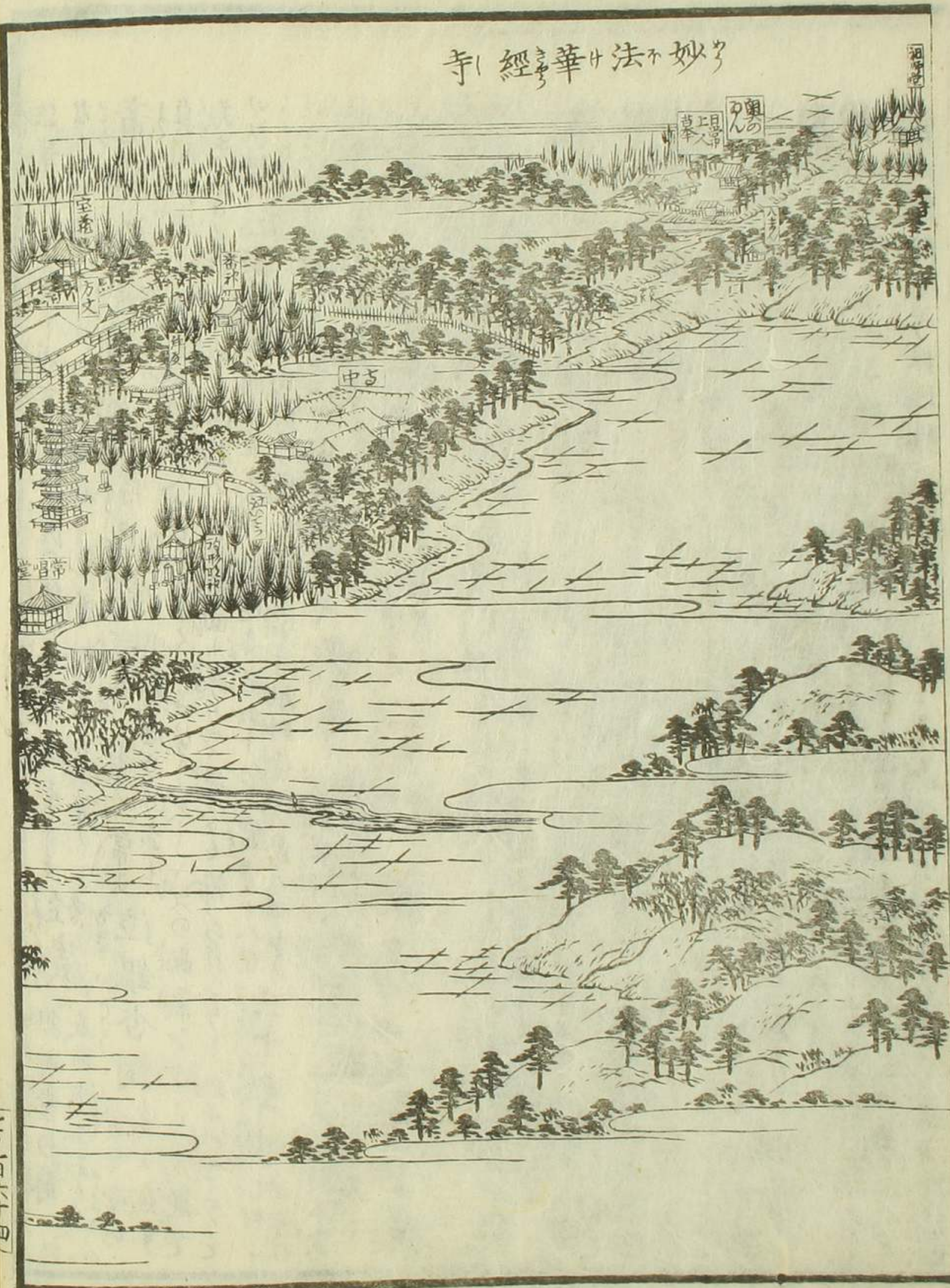
奥の院 方丈の構の外右の方の小路を入る三丁を過ぎ東北の方あり 文應元年
宗祖大士此境にありて居らむ因りて百日の齋法あり 即宗門最初擲法の道場也
蓮山法苑經持の回踏なり 日蓮上人は小屋形の後ふまをり 百間を築き
其中に往古大士手刻の四菩薩の靈像も此地に安置ありしと云く 當寺弟

十二世の住持日珠上人此地を封じ法華一万部の経塚を築き古より宝蔵と
安置せし日法上人の作の宗祖大士の影像をうつしと云く
開山日常上人石塔 同所道を開く左の方あり石塔の上小草堂と云く
常忍修院と号し因幡國富城の産中々兼久二年庚辰を以て生る 本化信の
本五郎

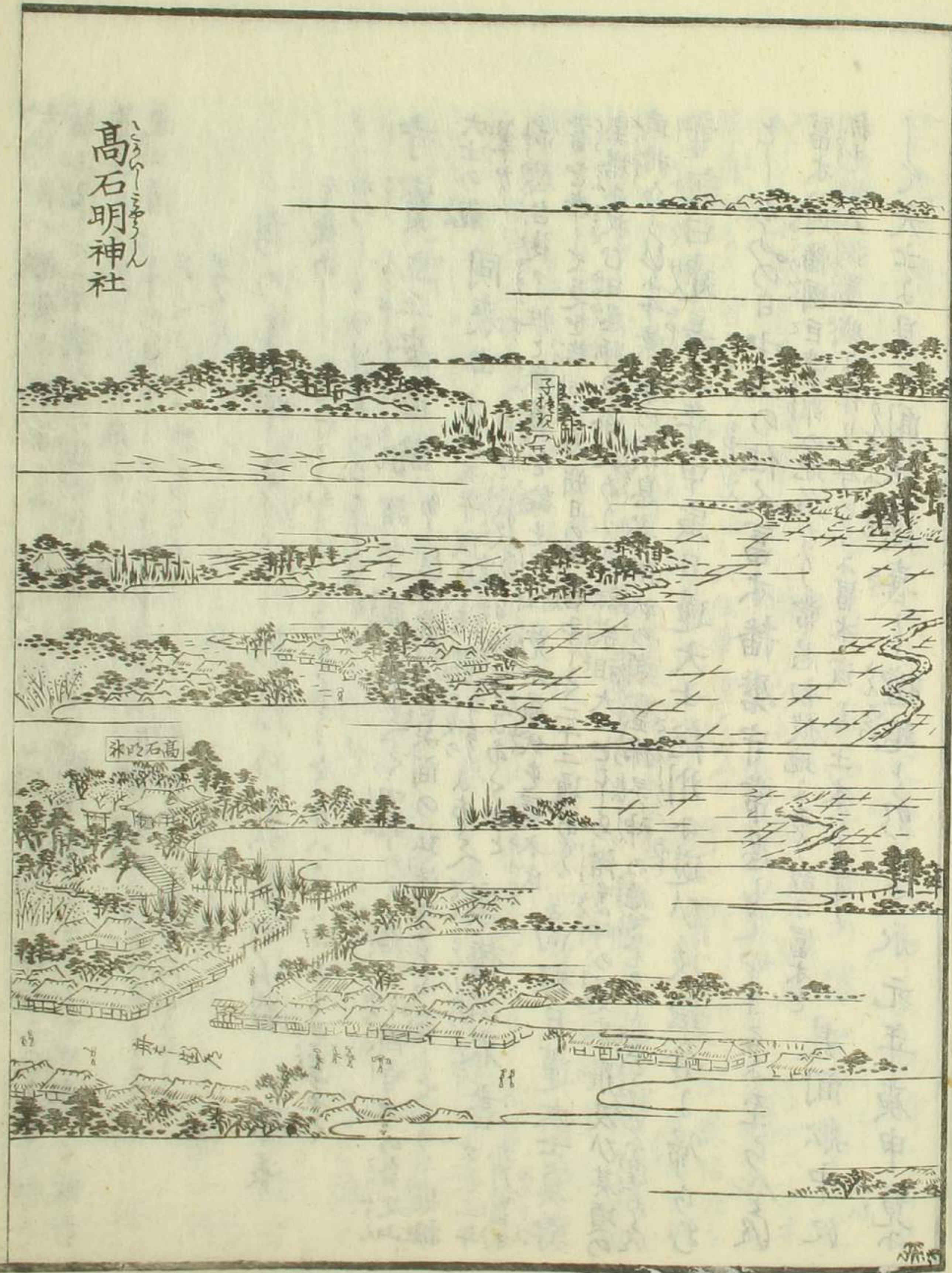
東土産
杉の
系
あじ
の
後乃
教
月
宗長



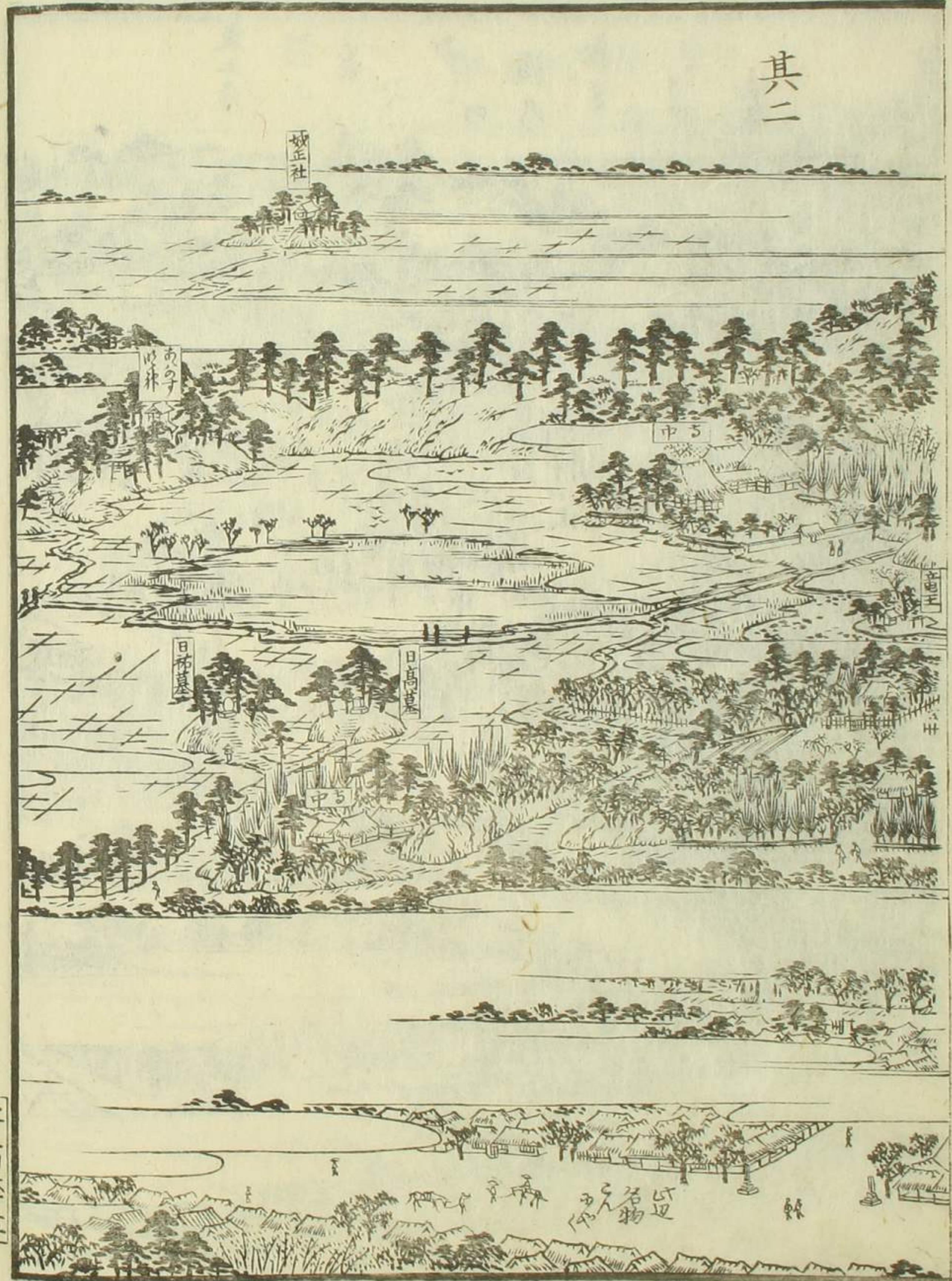
寺 經 華 法 妙 寺



高石明神社
たかしのみや



其二



入道と長て播磨守常忍と名く後下徳國中
山邑に移住し鎌倉に仕へ土民稱之
富本翁と云ふ日蓮大士の法化をたぐ
大士の滅後竟に難渋して日常と改む
正安元年三月二十日八十歳なりて化す
東土産 其の終を中山の法華堂本母寺に
一者一とありて日蓮大士の法化をたぐ
大士の滅後竟に難渋して日常と改む
正安元年三月二十日八十歳なりて化す
東土産 其の終を中山の法華堂本母寺に
一者一とありて日蓮大士の法化をたぐ

杉のまゆあ あ〜〜 法華の教の月 字長

寺實立正安國論 諸山小蔵を以て四部なり
洛の中園寺甲の身延山 常忍台後了性と法義と論を了性竟小屈伏を富木氏
大士の親 同来由 文永五年戊辰法燈日頂の
筆なり 常忍台後了性と法義と論を了性竟小屈伏を富木氏
書を奉く是を告同十月朔日の返書なり
高祖日蓮大士眞骨 室塔小収む日忍師の添状あり其餘宗祖大士を
武將ありひふ千葉家の消息寄附状の類靈佛
寺記曰建長六年甲寅日蓮大士徳州小遊以
後鎌倉に歸らむ

と〜あの日中山の住人富本播磨守常忍も又か〜こふ至らん
富本、因播磨國巨濃郡の地名なり常忍初彼地あり故富本と
稱も和名抄罵城は作り今こふ富木或を土木とす
其間船中に
しく大士よ見え聞法隨喜一擅越とれる文永元年庚申竟

宅地を轉〜一字を營〜大士を〜居ら〜此時一百日

の間大小説法あり又大士自親一尊四菩薩の像を彫刻ありて

か〜ふ安置〜法華堂と號けらる 中山記云く室庫に一尊四大士の木
像二刻十軀あり其一ハ佛形其一ハ

善薩形あり皆大士の手刻と云く此法華堂といハ 時小曾谷教信 教信姓を
大士最初轉法輪の道場なり今奥の院と稱す 秋本太郎兵衛 秋本太郎兵衛
及ひ太田兼明等来く擅越也

後宅地をあり〜法華堂と號けらる 秋本太郎兵衛 秋本太郎兵衛
及ひ太田兼明等来く擅越也

白井の人なり子孫小至り其地一宇を 及ひ太田兼明等来く擅越也

創起〜白井山秋本寺と号く 及ひ太田兼明等来く擅越也

後中老僧日高尊師父兼明卒きその後日蓮大士の命を應〜

日常上人の教を受其家を改〜精舎と〜正中山本妙寺と號を

今の正中山 亦先の法華堂を合て一寺と〜正中山本妙法華徑寺

と号す則日常上人を関山と稱〜日高師を第二世とす然ふ佛

心院日現師 當山 十二世 台命ふあり〜寺法を更り〜己降

京棋より輪番〜當山の貫主とあれを毎年三月十三日より同

十九日に至るの間法華經千部讀誦七月十五日相撲毬行を十月
十三日八日蓮大士の忌辰なるやより大法會を設く近國の道俗群衆
一々大に賑へり

若宮八幡宮 奥の院の地より一丁をり東の方叢林の中より富木

氏の鎮守の神なりとの事
中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日高師より計
葉介貞胤へ贈られし文に云く所々堂宮田
地等々中畧若宮齋堂中山坊若宮別當職ありしは彼岸田谷中下畧云々又同什
物正安三年日高師齋堂を撰られし若宮持佛堂の本堂と稱す首題の懸幅あり
然れハ其頃ハ別當職を別附置置崇敬尤厚なりとありれと云り

妙正池 中山より北の方二十町を隔て千束村とのふあり

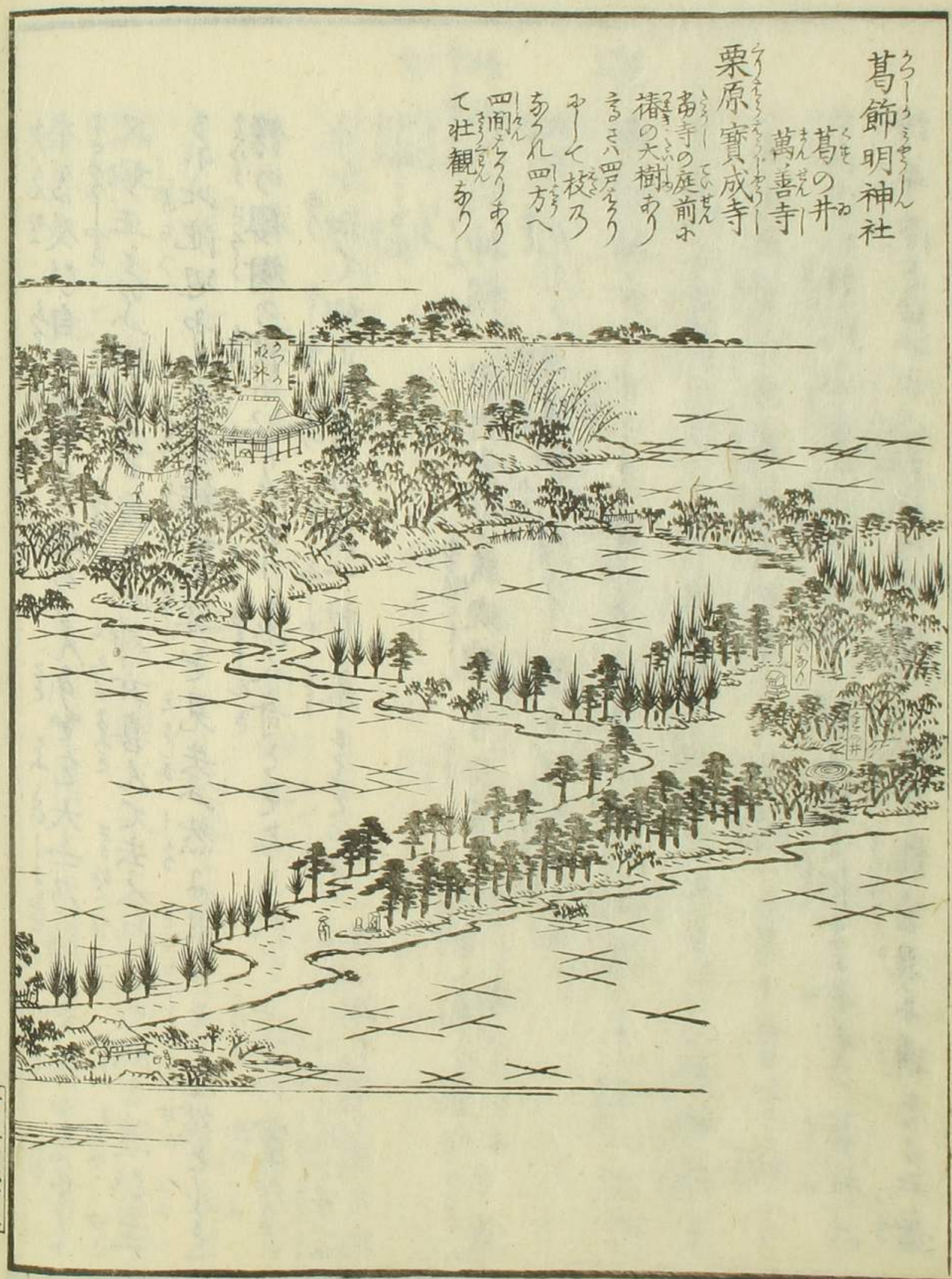
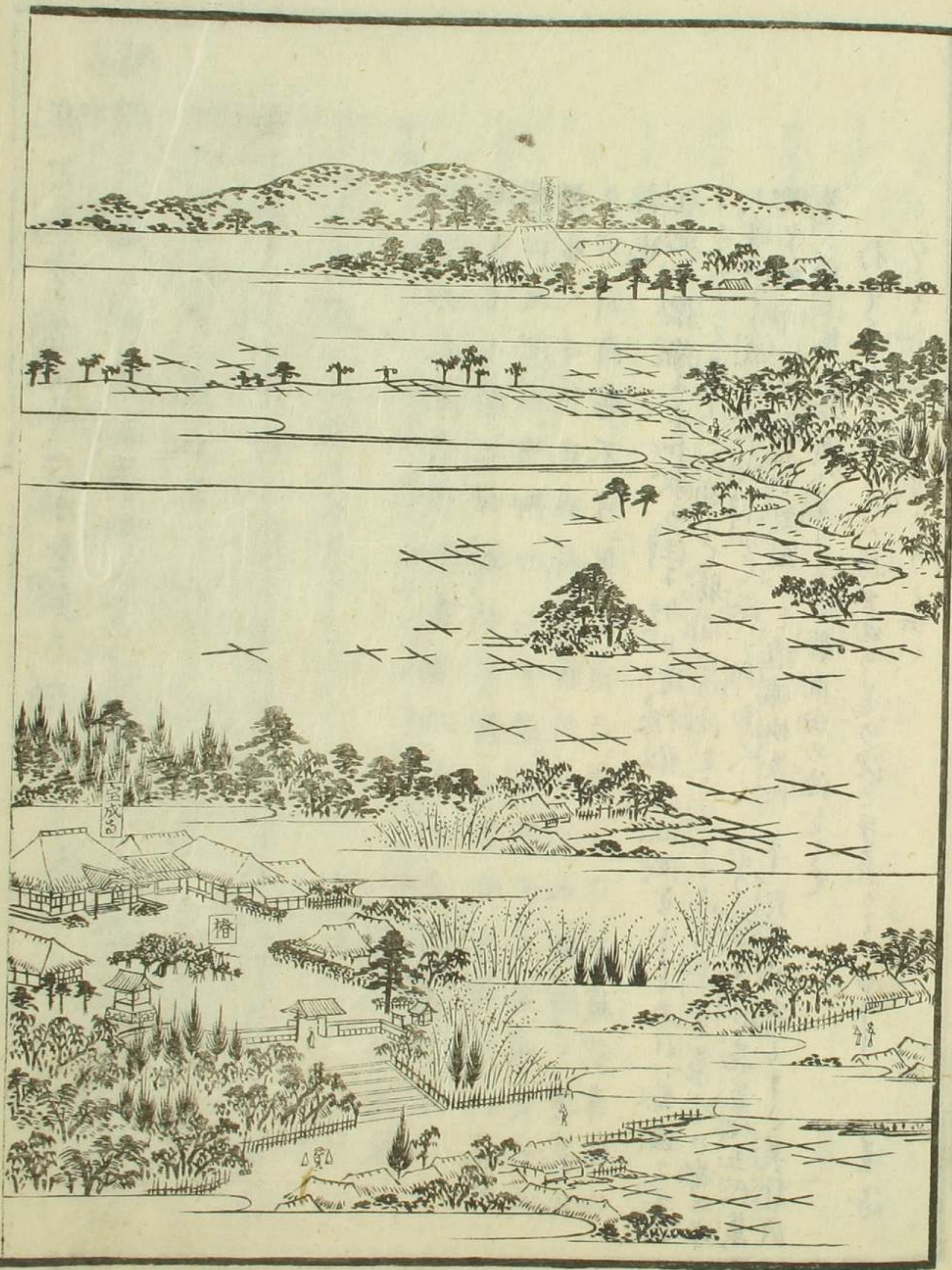
千束
邑は
あふふ千束
の池とも号く傳云文應元年庚申日蓮大士年三十九富木常忍常忍假假
所の法華堂に入りひ一百日の間妙法論を轉轉群生を教導
あひし頃此所の池靈婦女と化し日々彼地に至りて大士の説法を
聽受し信心衆を越え一時彼婦女来り大士に向て云く妾今
尊者の法施を冠り一乘の真因を得んと願くハ大士手書の

本言及ひ自の法号を賜ふんを乞大士乃曼荼羅を曼荼羅
又妙正との法号を授め婦女喜んで去人怪むと跡跡隨隨ひ至
る此池辺あり其婦女の姿を見失ふ然然其本堂忽然と忽然
傍の櫻樹の枝かりてあり衆人奇とせり於て此池の靈なる
るをる知て妙正と号け後一社を奉まるとり
其婦女性返の道曼荼羅
罹小路と字或を蛇

妙正大明神祠 同所あり或燒神とも稱せり燒瘡を患ふ者疥あられん
念して験ありと云日蓮

葛飾明神社 中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町

をり入る叢林の中より葛飾の惣社と稱されとも祭神祥な
らも同所真言宗萬善寺別當より祭禮ハ九月十五日あり社あり
東の方此林間稻荷の小祠の傍に葛の井と稱する井あり當社此
浄手洗といふ土人相傳へく此井の水脈龍宮界を通まると云瘧



葛飾明神社
 葛の井
 萬善寺
 栗原實成寺
 南寺の庭前
 榎の大樹あり
 言さば四ノ宮
 ありて枝乃
 ありて四方へ
 四ノ宮あり
 て壯觀あり

疾を患ふ者此井の水を飲み驗ありといへり
勝間田の池 同所船橋街道の道傍あり此所も栗原本郷村
の内なるか上民本郷の溜池と唱ふ池より東ハ寺内村と云池あり
西小高より熊野三所権現の宮居あり萬善寺より兼帯
祭祀を祭禮ハ九月十五日なり

万葉
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
右或有人聞之曰新田部新王出遊干堵裡御見勝
間田之池感皆御心之中還自彼池不忍憐愛於時
語婦人曰今日遊行見勝間田池水影濤々蓮花灼
々可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌專輒吟
詠也

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
專輒吟詠也

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
專輒吟詠也
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
專輒吟詠也
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
專輒吟詠也

十載
此のあり性ありをまかむむ勝間田ふなもあまじん
二条大皇
大戸宮肥後

後拾遺
ちもあまじん世理人勝間田は池ありのほろもな
範永

新撰選
かみまは池のちをむれそ池もあまをのちかりり
寂然

舟枕
幸を授くちれん勝間田の池あまをみはれあり
おん

夫木
かみまは池は池もあまをのちかりり
頸仲

日
かみまは池は池もあまをのちかりり
為相

家集
かみまは池は池もあまをのちかりり
慈鎮

日
かみまは池は池もあまをのちかりり
家隆

夫木
かみまは池は池もあまをのちかりり
好忠

日
かみまは池は池もあまをのちかりり
大貳

家集
かみまは池は池もあまをのちかりり
善徳

日
かみまは池は池もあまをのちかりり
西行

新撰六帖
かみまは池は池もあまをのちかりり
和家

勝間田池
栗原本郷邑の
地あり故に
本郷の溜池と
号す

万葉集

かみまゝに

池を

これ

ちぢす

あし



七百七十

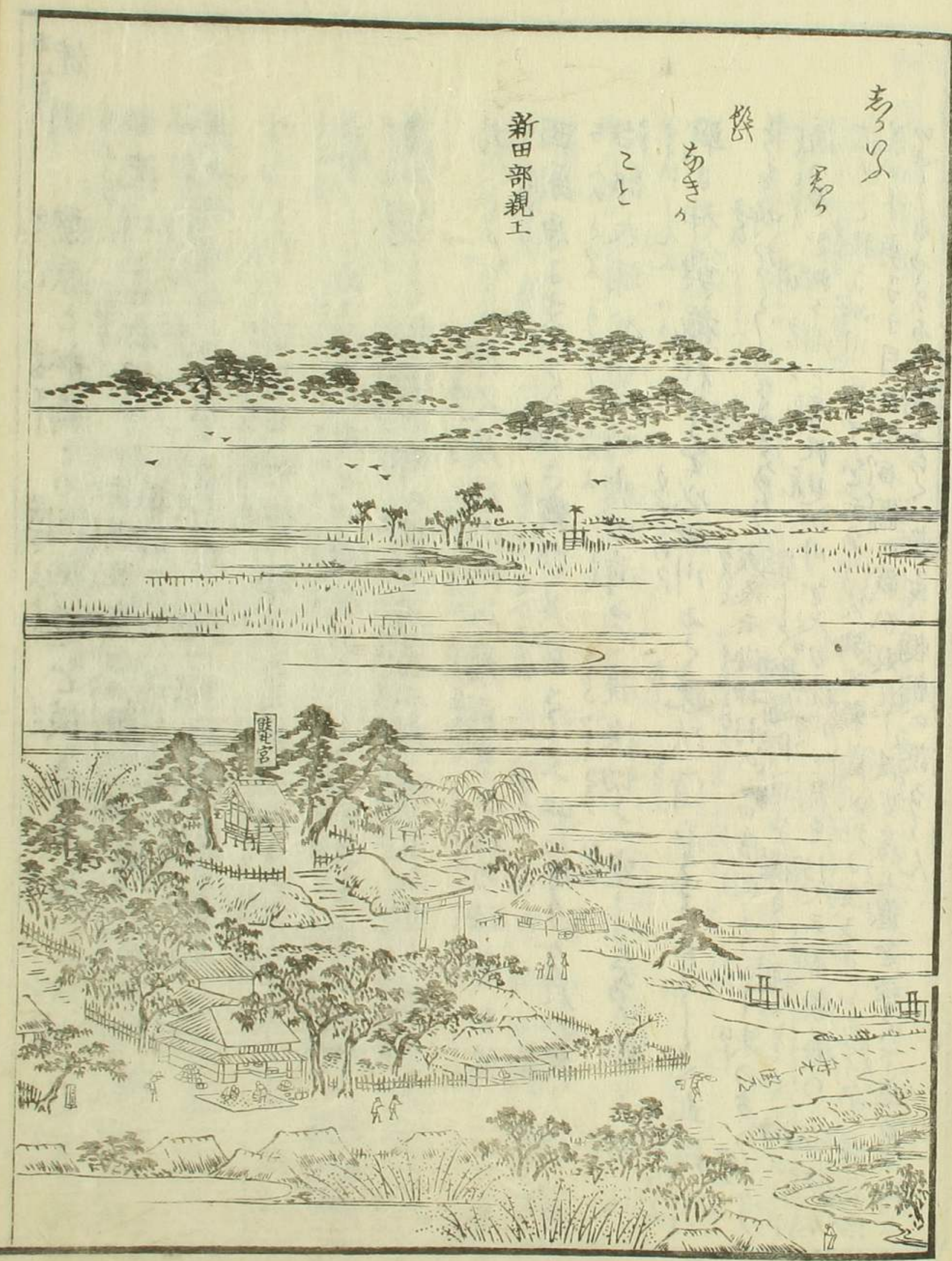
あつみ

あき

新田部親工

あき

こと



洗川

栗原と船橋との間街道を横きりて流る小川を号く

血洗川とも称せり 千葉満胤意富日神社へ神傳云右大将頼朝卿征

夷大將軍の宣旨を蒙られ後其威勢実草木も靡くを

なりされと意富日神社の神官の累代天子勅宣やしく武門

幕下あはれを度々の催促ありしは是に應せし故に頼朝卿

憤り甚しく船橋六郷の地を葛西三郎清重に給ひ清重此地に入

むとせれとも神人及び六郷の農民等三神の神輿を前より昇居

西栗原より支へて防ぎ戦ひ其乱々々止らざりしは終に神官

治部太補基義神輿の前より腹掻切く空しくありぬる時乃

戦ふ神輿穢れざるを以此川を洗ひ清めたりしは血洗川

とを呼ばりしなり 或人云海神村の入口浅間より北東の方の山あり

流の源を蛇の淵と号し是は小川をたがひ洗川と稱せしは云源頼義の太初洗水

なりと按よ此川の源を云ふは又頼義此地に至るを云ふは頼朝治

兼四年庚子十月豆州石橋の戦ひ敗れ後安房上總を往く下総の國府よ

りしはあり疑ふらくは頼義ハ頼朝の諱なり

阿須波明神祠

西海神村あり禪宗大覚院奉祀を娑竭羅

龍王を祀ると云 故此地を海神 耕田と道路とを隔て海汀に向く

華表を建る九月日を祭祀の辰とす此日芋を食すと旧例とを

故に土人芋祭と号ありはせり 當社よ小柴と号あり旅人

長途の安全を祈りまゐりしと云はる奇林良林下総國阿取波宮とまゝは社ハ

神の誓ひあり小柴を立く初よりありと云と云

萬葉集 爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波

伊波々牟加倍理久麻豆爾 限丁若麻續部諸人

新十載 名寄 今もいふかへさめゆりありあすへの宮ふ少柴といふ

いづれとおもひの形をかへてかへるをけしむ少柴といふ

石芋 當社の入口あり里傍小云く往古弘法大師東國化度の時日され及ひ

此石と通しせられとあり是に入あり一宿をたもつ小柴家一人の老嫗

あり是を許ししはあり大師邪見の輩を教導めん方便とてその家の

傍の芋を加持して石とせしめんと此石其芋四時とも不腐れすて年々生



意富日神社
舊地

意富日神社初鎮座地

船橋驛舎の入口海神村御代川氏某

地はあり日本武尊此海上中々八咫鏡を得る伊勢太神宮

の正體と鎮座あり旧跡なりとの入今意富日神社の地より此

昔ハ露川は作り露ハ水の深きをその訓義わく日本武尊と尊まわらせ此の海の

際をわくせむり神鏡を得せあまのせりとの後裔あり其子孫今猶連綿と

夏見厨海神村の北の方より今東夏見西夏見と唱へて二分

古伊勢伊弉神の神領なり意富日社の神主是を務たり

神鳳叙曰伊勢太神宮造替遷宮事曰食米處々

注文二所太神宮御領諸國神戸御厨御園神田名田

等合下總國夏見御厨上分布三十段口入三十段一名船

橋二百丁

神鳳抄其餘下總國あり相馬遠山形葛西猿俣萱田神保等共ニ合せ五箇

所より意富日神社傳よりの万葉集よ

可奈之伎乎刀爾多氏米也母

かくよめハ古葛飾の早稲をこく神ノ新嘗なり一うをいへりありと此和奇の
 こころも此かしの早稲をこく神ノ新嘗なり一うをいへりありと此和奇の
 忌まひもあつて我うのくるとあつて人の来んうとあの方よ立せけりく肉へ入せん
 とまてふあつていふとたてていへり

船橋 驛舎なり海神村及び九日市場村五日市場村等の三邑の

徳名や古の神領の地なり 舊名を湊郷と云ふと相傳往古

日本武尊東征の時此地に至りあひ海上や一面の神鏡をゆ

あり 其地を海神 依て其地は神鏡を遷しあつて然も其頃ハ水無

月や早打續官軍大さる尊其神あり一ハ驗あり二三

日の間大雨降續官軍勢ひをゆる竟ハ凶徒を亡しり其後湊

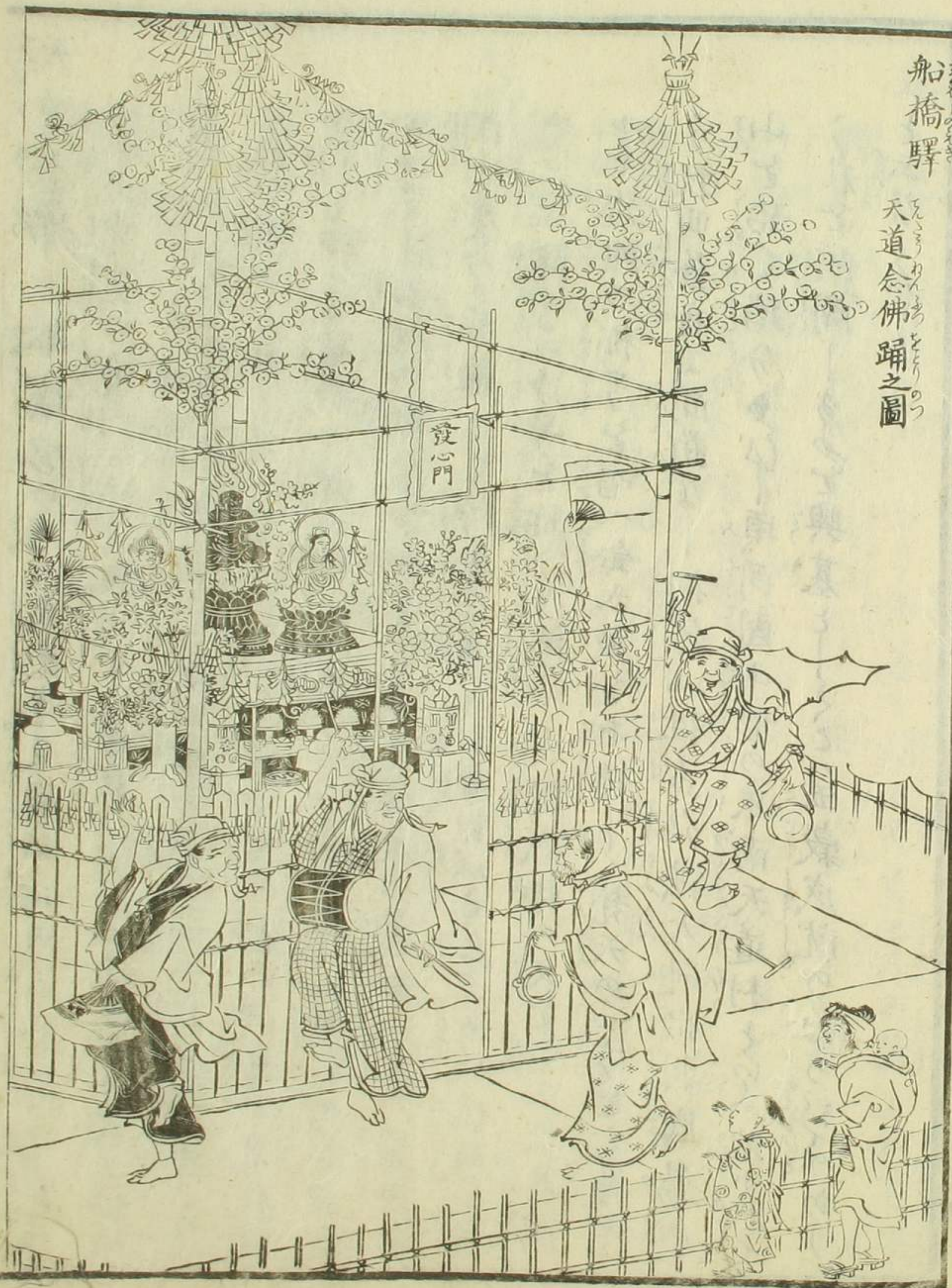
郷の辺洪水や神鏡の宮所へ移通へき便なり一ハ船城

浮や橋とあつて此地名発るといふ 東鑑曰文治二年丙午三月十日

東黄左典殿の賢息首服を
 催促を加へあつて由とある条下下徳國船橋御厨院御領と云ふ

船橋驛

天道念佛踊之圖



天道念佛

船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の

薬王寺等の境内に於て執事毎歳二月十六日始り同十八日

終る昔ハ一七日の間執事堂前小土を以壇を築き竹を以柱と儀多

これを梵天と稱し其四方は四の門を開き四十八柄の神幣を建注連

を引し由緒皆悉く諸の佛天を表し其内ハ大日如来の像を安し

平素と一旨味の飲食を供養せり其詰衆の道俗ハ各一昼夜此

間六度つ垢離して浄衣を着し白布を以て造る所の宝冠を頂

き三宝諸等の沙号を稱へて敬礼し六根懺悔の文を唱ふ又其間

中々弥陀の称号を唱へ鉦太鼓を打鳴し梵天の四方を右繞せ

り救回昼夜は間断なく相傳ふ往古弘法大師出羽國湯殿

山を始り踏分ゆひ頃同國山形の東南天道村との地ハ於て

これを開闢し其を興基とてこハ五穀成就の爲のゆきあり

と云なくハせり

遠く零

船橋の沖はあり俗釜淵と号く土人の諺は云昔平

将門の愛妾桔梗前将門亡びて後ハ流石は都へ歸らむも物

うくと船橋の里ハ暫しやもい終ふ此海底ハ身を沈りしと

なり此海の漁幸あり其魚の諸魚と淨膳料とて江戸へ運ばる

神宮へも持まわすはとあり故は此辺の海濱と浦と名つくと又船橋太

社説は此海は産物を産むる所なり又船橋宮神廟の沙紋海波ハ眼ハ自然ハ魚を産む

あり鮎の腮ハ沙紋の形ありと云船橋宮神廟の沙紋海波ハ眼ハ自然ハ魚を産む

大峯山慈雲寺 同所二丁あり北の方新田あり五山派の禪窟

中々鎌倉建長寺第二世佛光禪師開基の精舎あり本寺

釋迦如来ハ行基大士の作服ハ文殊普賢等なり昔ハ盛大の

寺院ありハ永祿年間里見義弘ハ兵火ハ罹りて灰燼と爲る

又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ棄つれり謬り利根

川へ沈りしと今其處を字し鐘淵と云り國府臺の条

宝曆中徳巖とて禪僧

再ハ鐘を造るといふ

下ニ詳なり



船橋
意富日神社

意富日神社

意富日古八日を比よ作る天正以來

船橋驛上總海道

成田海道との岐道五日市場村に宮居す世に船橋太神宮
と稱を延喜式内の淨神や一々関東一之宮と崇む神官大宮司

富氏奉祀せり

當社大宮司富氏の始祖は景行天皇第四の皇子五百城入彦尊あり天皇に
して船橋より下向なされり妙ひ東國八千八村の縣主兼當宮の神官を司りし
あり然るに仁平の頃荒木田滿國の舎弟基國を養子とす其後基國の時又嗣
あきふ依り千葉滿龍の子基龍を養子とす此時日月を以て家の紋と
せり天正十九年辛卯大神君當社流泰指の頃神官富氏御紋の軍配
團扇に根引の若松を添て献り其後上意よりて若松は軍配團扇を
家の紋とす隔年二月年始に八日例に任せ淨夜大麻に根引の若松を添て献上
しなり登城をもとて永規とす

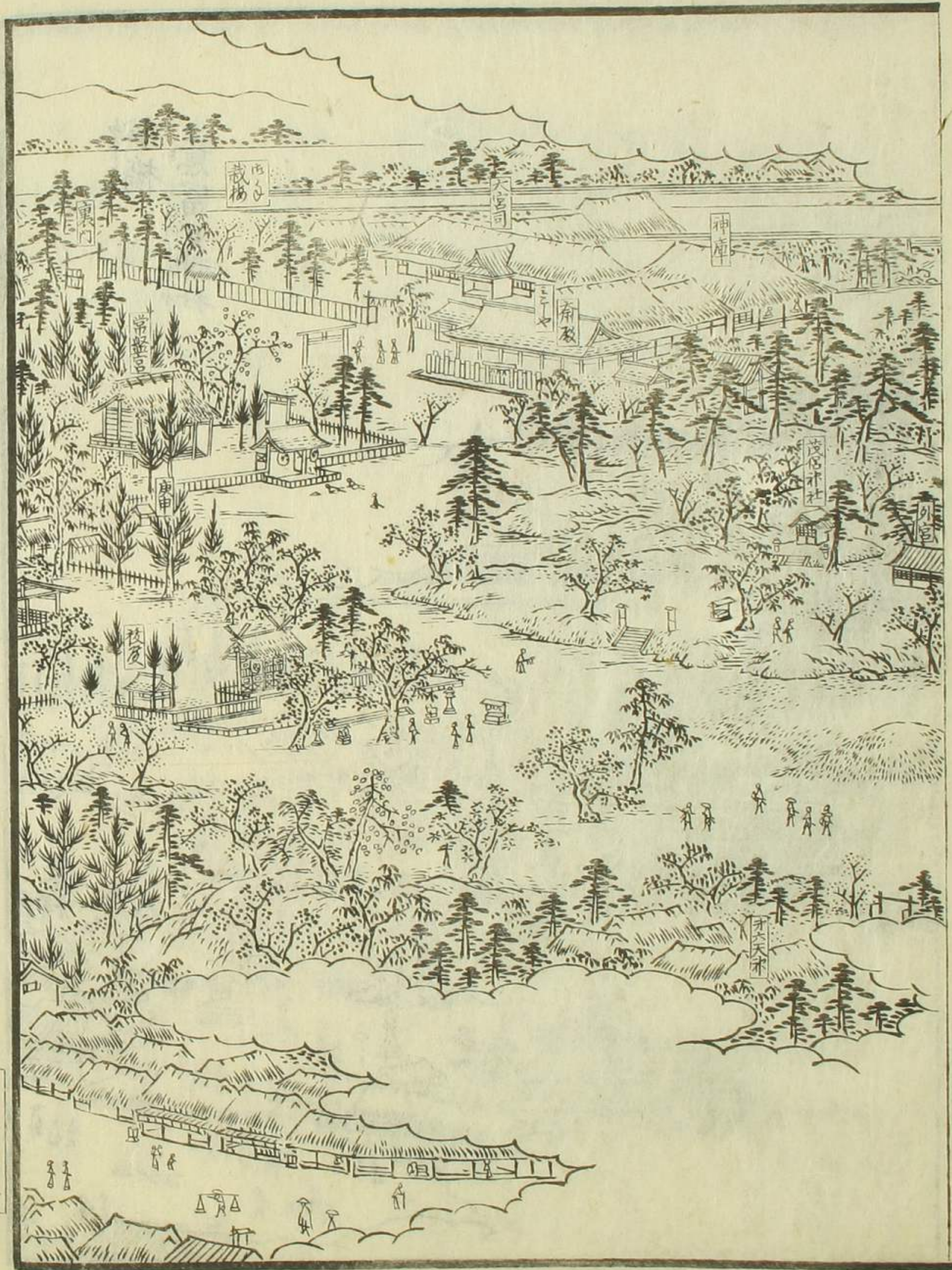
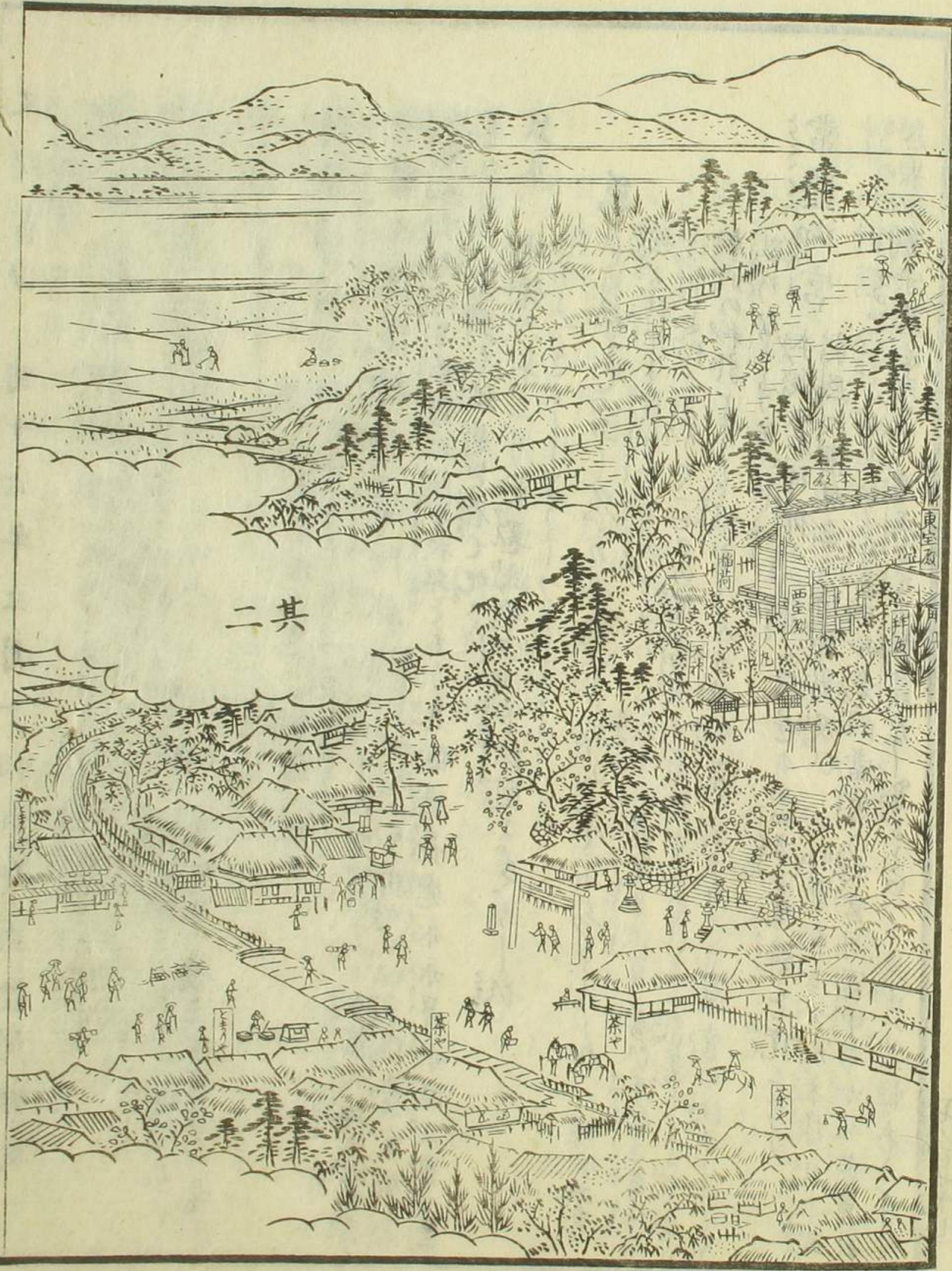
本殿祭神

天照皇太神宮

二座相殿

左八幡太神宮
右春日大明神

延喜式神名記曰下總國葛飾郡二座
三茂侶神社意富比神五月二十六日戊子授下
又同書曰五位下意富比神正五位下
又同書曰五位下意富比神正五位下



又同書曰 同十六年三月十四日癸酉授同神從

神寶 叢雲御劍 長一尺五寸あまりありり来由ありと云々

神息劍 長一尺ちうちあり日蓮大士木劍 題も同一大士の納らるる

柄を巧く其所全うし

近衛帝宣尔 平元年辛未六月十日船橋六郷の

千葉介満胤神領寄附状 兼久元年己卯四月十六日船橋六郷の地を寄

限海西限洗川并杏懸北限石枝路とあり其餘應長應永永亨永祿文龜元龜

家集 建保六年十一月素還法師于時 下総國よまへり

悪いものゝとていつか久きかたてておちやふあゝん 後念右大臣

常盤御宮 本殿の右神林山の麓にたせあふ四方は隅羅を繞らせり

息野伊勢守基治天海大僧正と云ふ勸請なりと云ふ来由ハ其憚あるとて

如集り廣前 天正九年辛卯當社 葉集 尊節 早稲を費すともあり

至り登雨の新稲を新嘗に取分置る 習俗あり 延喜式の中を

あり文字荷前 又三美録 新銭を新嘗に取分置る 習俗あり

取奉故三三又三美録 新銭を新嘗に取分置る 習俗あり

之早穂二十文云云 又三美録 新銭を新嘗に取分置る 習俗あり

齋殿 洞所大宮司の構に傍てあり 御饌殿 洞所はあらは侍供

社記曰景行天皇四十年皇子日本武尊東夷征伐の勅をまり 登向

其時海上に光を現し一ツの船の中は神幣を採添る 弱木一面

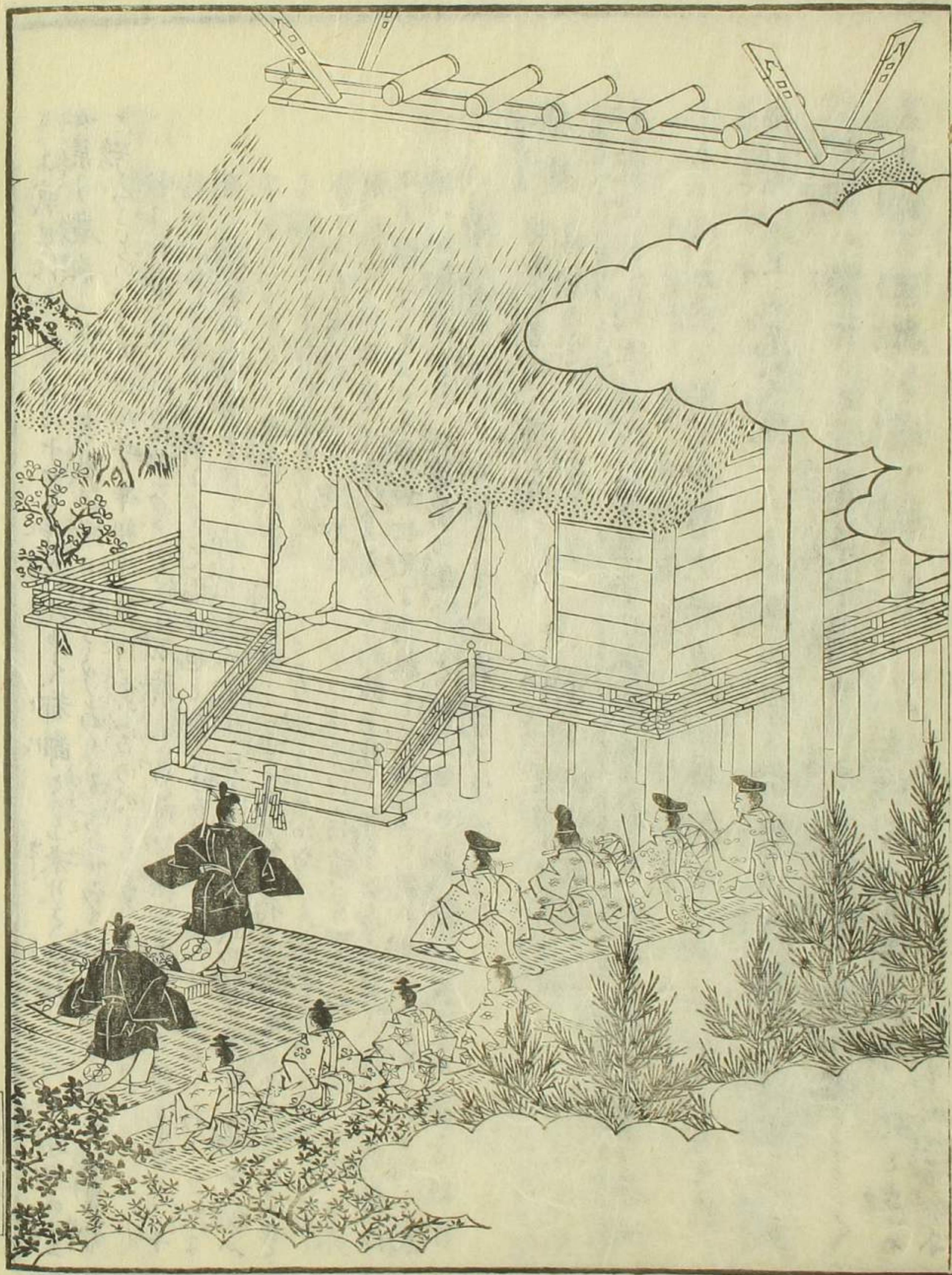
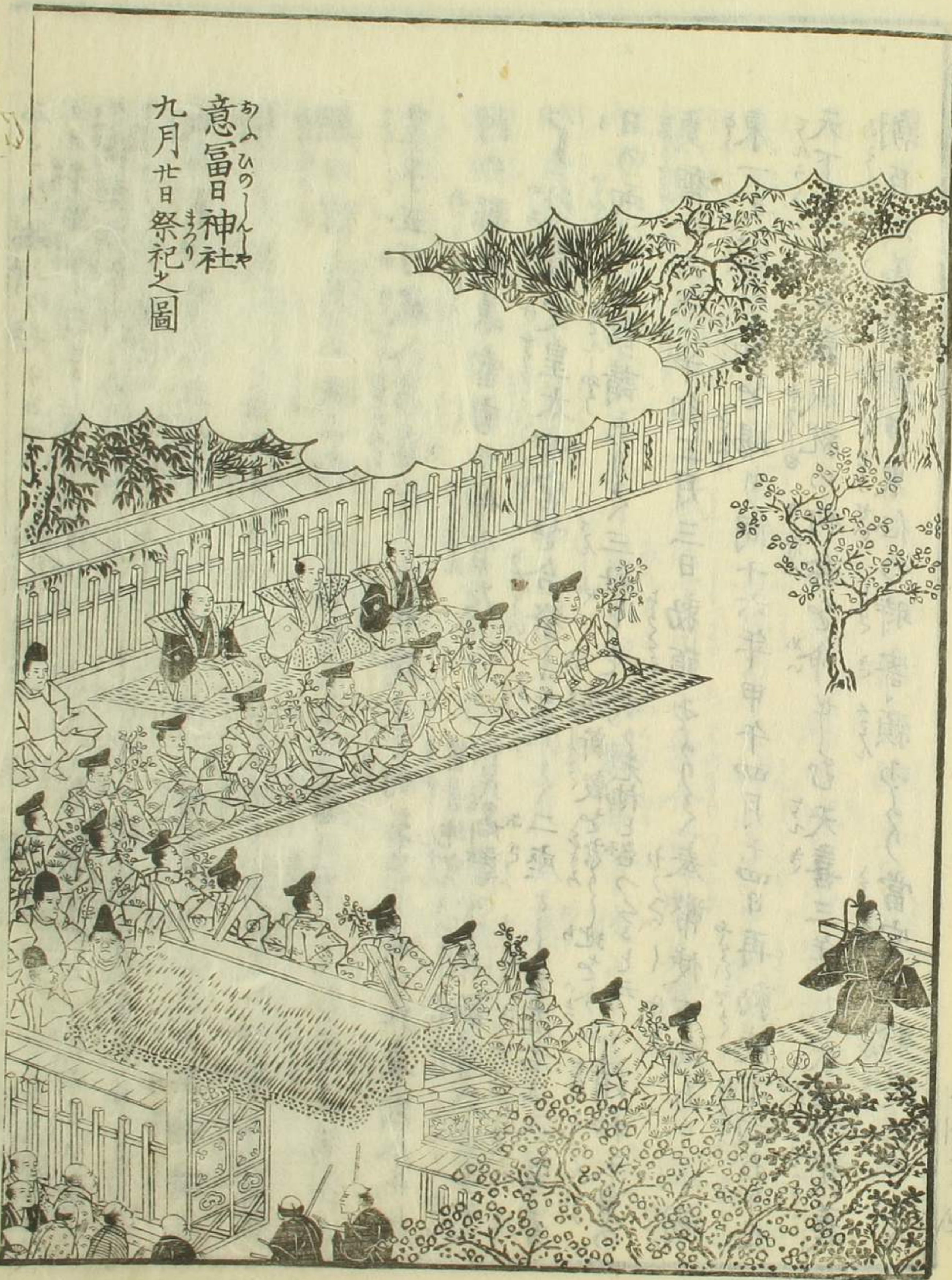
の神鏡の懸れあり 尊是を得あり 則大神宮の御正體と云々

夏見郷に宮殿を建て崇まらるる 其神鏡今猶當宮の御正體と崇め

其神鏡今猶當宮の御正體と崇め 夏見郷に宮殿を建て崇まらるる

其神鏡今猶當宮の御正體と崇め 夏見郷に宮殿を建て崇まらるる

あひのり
意富神社
九月廿日祭祀之圖

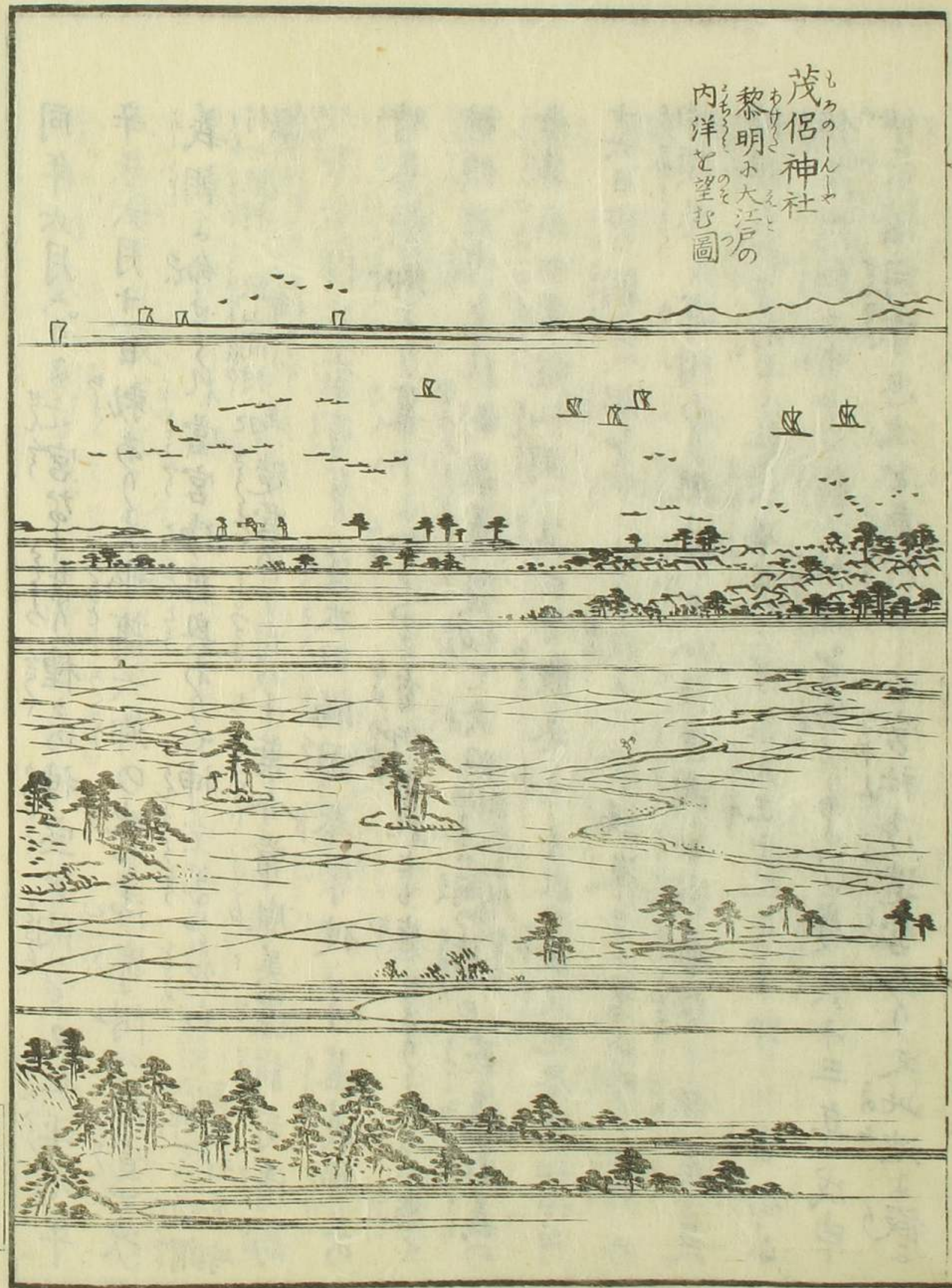


あつひ海上の光りあつての神を求むる者多しと云ふ事今も
九日市場村に存せり同時凶徒禍伏の流矢を刺く者多しと云ふ事今も
其後齋海村にありて今も矢刺と云ふ事今も
と駭けく共々當宮の神人なり
我々は伊勢國五鈴の川上より天降る神あり今より其神垣と
等しく崇へると云云依尊其由を帝に奏しあひて伊勢太神宮を
朝日宮とありて夫は對して當宮を夕日宮と稱しあひて天皇第四の
皇子五百城入彦尊を以て船橋より下向ありてめられ東國八十八
村の縣主兼當宮の神官たり其年新嘗の祭を行
つて後豊受皇太神宮を合祭せり二座とて又左右は八幡春
日の両神を勧請ありて三社とせ其新穀を嘗りて地を今も
貞觀十三年辛卯三月三日勅願ありて奉幣使下向ありて
東一之宮の跡を賜り同十六年甲午四月十四日再勅使下向ありて
天下泰平五穀成就の祈念を命せしむ天喜三年乙未源頼義
朝臣同義家朝臣東征の時寄願ありて當宮を修造ありて

同年六月六日遷宮なり種々の神室を納らる又仁平元年
辛未六月十一日勅ありて船橋六郷の地を寄附の院宣せり
義朝を命せり當宮を再興ありて神室を収らる六郷は所謂
村七能村下飯山間村御造宮の下司八千葉介常胤美濃前司清高
金曾木村夏見村等なり荒木田満國奉幣使より基義神主の
大澤平内兼家等なり時頼朝卿より幕下より加へて肯仰あれども應せりしうは悉く
神領を打とれ刺基義腹切て失ぬ其後基義の
舎弟権及基継仙洞へ其由を歎奏上りて其後基義の
十六日實朝公へ詔を下し故より千葉満胤より昔の如く六郷の
神領悉く寄附あり然る天文以後東國争戦屢發一頃當宮は
神領も大方打とれ衰廢せんとせし天正十九年辛卯 台命ふ
依船橋郷の中より新小社領を寄しめり慶長十三年戊申
伊奈備前守忠次を奉行として宮社造営あり又此地は假は



茂侶神社
黎明大江の
内洋を望む圖



御殿を建てせしめし時として入御ありし御崇敬尤厚く
御武運長久の御祈禱を命せしむ
始ハ神官富氏の家を假の御旅
館となし多し一御後御殿を
建たし御神官の家を同所田中との地へ移し
官宮の御神官富氏へ賜りし御再ひ元の社地へ
移り住らす故今船橋
の御と唱へ宝曆十一年辛巳勅許ありし古往の例に任せ毎歳
鳳闕を御後をまゐるよりとありぬ

當社の祭祀多き中ゆも正月十六日の御神樂二月卯日の五
穀成就の神樂殊に九月廿日ハ大祭ゆも其式甚古雅なり
前の日ハ角力具あり此ゆもハ天正十九年辛卯

東照大神君當宮へ御奉宮の時 上覧ありしとあり
茂侶神社 意富日神社の攝社ゆも同所より六丁計を隔て
東の岡あり祭神ハ木花岡耶姫一座なり故に淺間山乃号
あり當社ハ延喜式内の御神ゆも葛飾郡二座の中なり御手
洗池あり今ハ民家の地に入或人云茂侶神社ハ同郡小金領栗ヶ澤村に
ありし社司ハ交野氏祭神ハ日本武尊ありと云

三代實録曰 元慶三年九月二十五日 壬子 授下
總國正五位下 茂侶神正五位上 云云
此地ハ海濱に臨たる砂山ゆも松樹繁茂を西南の方
低く前ハ南総の驛路を見下し後ハ岡續ゆも成田の街道
東北に繞る富嶽の白雪房総の翠巒筑波の紫霞も共此地の
眺望入りし風光最秀美なり例祭ハ六月一日より
柳堂に御社の根の善松ハ當社の
地より擇とるを旧例とせしむ

江戸名所圖會搖光下畢

編輯 松濤軒齋藤長秋



校正 男 藤原縣麻呂



全 縣麻呂男 月岑幸成



畫圖 長谷川法橋雲旦



副刷 東都

佐脇伊三郎
朝倉伊八
宮田六左衛門

三十一冊 七百八十三

此は東都名所圖會を
加ら家正の三在采
徑より有せらるる
其跡を以て總て
此の科に西美事
有為母付かきあ

はる昔の聲をしのびて
ち何れも舞ふに似たり
たまはるにまはるをのび
たまはるにまはるをのび
たまはるにまはるをのび
たまはるにまはるをのび
たまはるにまはるをのび

白く製造火の油の煙
西の空より木の葉の
煙乃先きへ馳ぬれ為み
たまはるにまはるをのび
物乃本接合の部
たまはるにまはるをのび

心加^し中^に 那^らに 托^{たく} 志^し 此^{こゝ}
等^ら 僅^{げん} 夫^は 我^が 交^ま 遊^ゆ 中^に
あ^らは^せし^て 縁^{ゆかり} 多^く 時^{とき} 長^{なが}
初^{はつ} 幸^{あゆ} 今^{いま} 更^{さら} 二^に 宿^{しゆく} 有^ある
了^り 思^{おも} 志^し 志^し 志^し 志^し 志^し
成^{なり} 潔^{けつ} 志^し 以^も 志^し 志^し 志^し 志^し

志^し 乃^の 由^{よし} 孔^{くわん} 集^{しゆ} 糸^{いと} 一^{いつ} 何^{なに} 里^り
の 妻^{つま} 乃^の 如^{ごと} 事^{こと} 比^ひ 許^{もと} 以^も 務^む
檢^{けん} 船^{せん} 来^{きた} 然^{しか} 尙^{なほ} 官^{くわん} 商^{しやう}

上田 憲 憲


荃齋 盛義 書


拾遺

江戸名所圖會

全五冊

齊藤月峯編述

近刻

長谷川雪旦画圖

東都歳事記

全四冊

全

近刻

箱根

温泉名勝圖會

全三冊

藤原縣麻呂遺稿

長谷川雪旦画圖

近刻

熱海

同 雪堤補画

天保七丙申青陽

日本橋南一丁目

須原屋茂兵衛

東都書舗

淺草茅町二丁目

須原屋伊



三都發
行書林

同 日本橋通四丁目	同 神田通新石町	同 日本橋通二丁目	同 今川橋本銀町	同 横山町三丁目	同 日本橋通二丁目	同 芝神明前	同 淺草新寺町	同 神田鍛冶町三丁目	江戸兩國吉川町	同 心齋橋筋安堂寺町	大坂心齋橋筋唐物町	京都寺町通松原下ル
須原屋佐助	須原屋源助	小林新兵衛	永樂屋東四郎	和泉屋金右衛門	山城屋佐兵衛	岡田屋嘉七	和泉屋庄次郎	北島順四郎	山田佐助	秋田屋太右衛門	河内屋太助	勝村治右衛門

早稲田大学図書館

011688985023